條録

切字ノ矢　蕪村　士朗辞（文考）　大和詞　古今抄ヲ示ス於葉和漢見聞集ニモアリ

源語捃（大和物）　年月居所身他器ノ替詞（文考）　独言一言法問　儒佛ノ一言　是非善悪詞

然徒軍（後書）　翁座右銘　大小蘇　遊宴　大酒ノ失　莨ノ煙　箕ノ侍　巻頭ノ矢

時鳥ノ新（乙二）　次ニ帝居逸例ノ文

跋芭蕉庵碑書

切字愚論

発句切字乃傳を先哲より更に残して
何をの説を加へ抑も切字を上乃句
下乃句の終に二つ乃間ニ切有ル
相為ニ切字乃ハ切字を以て発句
を一句ニ成ス切字を入て一句成ル
分ニ成リ根本乃作ニ成ハ切字を
発ス句ニ成ル切字を場ニ成ル
切字ハ一字下知ル切字下知ル
テ字ハメレ乃ハ切字ニ成ル
時ハ切字乃友ニ成ル

切字愚論

発句切字乃傳を先哲より更私を残して
何もの説まかせ抔如斯上乃句
下乃句の作法を二つ乃間ニ切有る
相句まぜ乃切字乃如ク発句
発一句ニ成ル切字を入て一句成ル乃ハ
分ル事有り根本乃作ハ如ク成ん
発ル句ニ切字を場ふる時ハ切字
切字ハ一字下知覧ひ上ケセ
テ子ハメレ乃切字に成る事下へ
使ふ乃切字乃成事

國外

切字幾切字神能乃事に得乃
人丹そして一台乃流りてあるる
ものと考へ有り切字と
一句にいくれは丹て意まとを切字
取くもと以ての意と蓬門のあひ形と
なる意しる

かつて十人乃流をはめて世中乃
席と為るなり

文政十一戊子中律

應泉子

切字惣論

拾五の哉乃事

傘に切字はけ乃ちる物哉

題の哉

紙の哉ふすまの切字なり

ほくろ哉きめこの名ひなりおして考へる

治定哉

稲乃ふ山乃高さに月出ぬ

地中ふ山乃ふ おとりふ あゆこうれ

の影ひいの宮あるい流宮こ

又ちとふあゆむふの影ハ流ふこ考おるへ

祈表哉

蓮祇乃せきゆふ古流表ふ

いくも祈る意しる 何たふ かたしふの影い形り

嘆息哉

牛呵る表ふ明るゆ中意ふ

いくも嘆る意しる 思ふ 恨ふ のくるいこ

欲の哉

黄鳥なきしその外の名ハなくもかな

 我まつ遅し今年も小時鳥

 我を忘る友なき外の雨後の月

なきをまつとなりとも深くのふて有りもなき浅く

○なきのかといふもあるの時ひとし尤る心よりまうなえ

何も同し 連もなき又同し

欲浮(ホツカナ) 字義ハ欲かへと見るなる詮文あり

○付句 もこの外の句まて あれ此いてもあまのこし

割の風

 此よりのおもひ出し一の枝 梅の花

梅の哉とも言ふ也よく作る事しに見るへし

流もかな

 多枯し風のやまみもなき野かな

吟して見るへし

浮哉(キレズ)

 月清し今宵ハ汲もくめる哉

是浮哉なれとも切字をつかひして

 風乃身を竹斎よ似るこの枝

これし此ハ義なかくき梅の乞ふに

是又うきに有句中ふて切るへき心よりて切るを見し

その和なるりと吟して見るへし

 ながくに 前きのか とり川の枝

 かすみきの風 ゆかりせに おもひての風

 おしもに まくれに

哉るウクスツヌフムヨルウより清く哉を

皆浮にあり 中ても和なるにハ是なりとも云ふの

哉といふよ まつせよするなきのしも

 是等にせし 是も有り何とおもふに

あとなりされとも自得の人あしらひてをもとせるへし

○又浮なるとも一句のおさまりよき是を切るへく分るし

 俺しさい衣服を掛くる巨株に

門の事を小字晴 四桟小えに

是等の句を上よてきゝ時ハ前きれにあると心得
遍し　○こゝ等ふと切て其の流く哉といふをし

武士のやなくはまん阿まに

其気一はし　無き人も是れ
是ハ中なくきむ遍さゝ意く　旅ふ遍きく人も外の意
なり○んまて切字ふハ阿らし　句中に切を
切ったるなり

初冬の幸里牛のなき日影

傘化の眺も故蝶のやとりに

是れハまさをし　梅かりけるとつゝ外あつて
一句のおさまりを吟して之る遍し

花蝶をあるやとえる劇漸に

義の気にむも更や將の旅

只今のやを捨ふに
吟して之るへし

鳥琴ハ云ぞ是ハ我ハまへさても あて歩るとも云

恩の哉

梅柳はさ若衆この女かな

惜とハうすまておもむいやまゝある趣をかさね
しなり　腕古錦しはなき年はふ阿りと添て
梅柳さも若衆女この外　と出せり
これそてハ梅柳をあをしく女まくあらそひある意まれ
はもし他りて人をと通ふしなり　此句ハ延宝天
の吟あり此の風俗よまりて作りし句也

蒹ハスル哉

芋の種とる人のこゝ経に

敷きに秋まさ庵の芭蕉

人のこゝハさとして州木多数の前ひともさまさ女
を身なうけて板薬しまする哉なり
自他の句のちは書きれおしよくなお見へし

三段の歌
三字加
二字加
三名加長

月みるに山ちかきたちの艶
裏ちりの春とちり月雪の
前後の三段加く是ハ月る耳ホロシ三ホの歌をら
又ゑ去 歌五 未来 ちとこ先てちちるるり
雪の白ハ三段加の都るう冬して老る屋
ちくてかるるるちを二るの流く世つるり三字加ち
ちしゝ 又三字加の句
花ちうるる歌やちとん夏の屋
花ちゑち柳 ハ歌をちきつれ
六月ちを岸の紅れ谷乃水
次二るを三段くたしきるの二つ三段二つ三ふなり
折人ちを花る根ちん風ちな
ゑのるより山の猪生をし 未来 歌ら世
右二るハ二字の加く二るの流り方ホのるちいちん

名所歌
名所歌

菖蒲やあう波の山を月秋の歌
道深や世ちを世の歌ん風
名所ちのちを歌とはのふちしちれ
といくくるるのちちを歌してはのふ
屋きやくるるしく後るのちくちのちふ
ちりくて歌ちのちにちのちを入ちまを
ちの初ちのれ世ちを屋りれ
夕影や物ちいちしの歌ふ
名所のや歌身得のくちをこのるち解生屋
新ちちるるて生ちるりちちる屋ふるし
ちれしを花ちちちりちちちちちちちちち
いちちやちちちちちちちちちちちちちち
らを入ちれしちを加程歌のふちるるるいん
出ちるくふしちちる 旦ちち乾やと鶏

此ちら句にて此ちらのてにをはをもちてうくる也
とせり　又日来未谷抄ノ説ニテ疑ナリトソ
蝶煙し　けふも花ちるころの風

前きれ式

鶯は山鳥鳴きて何ゆゑの風
措揮むしろつゝの柳かな
これハまへの山鳥と打つゞきむしとつゞけし
て哉と留るハ前句の季と松虫のかくれまでて
おのれとけふる谷のみはし
これさへきれまでぬ松虫と結ぶるよしまで
此頃の前きれの地ふるに出てけれと五月雨まで
ぬるとこふのふさかよりつゞく前きれハ御縁に
そのゆかしとまて追し何やそもよめならぬを
下へつゞくしへふ追し
郭公鳴音にくもる荻の花

小傘さしけまかりし霰かな
此発句ハ　小傘さしとよりつゞくれにかくのこと
上の文字をよみてにをはふゝくしても下へ続きて哉と
留るなり
ちるまでの木柳のさかりなる花かな
ちるまでのふさかりと柳まかへこのふ
是等の続きをよむ事えへし　何れも是ハ熟ハ兆は
色ハ篭赤盆中乃帰りし哉
ち嬉敷竜をあらしきはらふ
是等ハ　色篭赤　ち嬉籠竜と続きしを
引きれしも中せるのつりそ申し　よきしも
前きれのたくひまた引きれ吟して志す追し
且ハ且の哉　自至の哉　かくて前きれ字成哉
嘆息の哉　称美の哉　是ハ生つまる名前切をまね
るる事也

梅折哉
并 疑の辞

しなやかくもまつ風に折て 北那に
庭根着の弓よしと問ふに
梅さしに庭を収ける柳との花
梅のてり 蝶 柔 世にいふ切字にて何を抑し
いひ出る約 おさゆる約 かゝゆる約 庭下へつゞけ
吟じて志る亀し 又
南天に節さりて晴妙に
春吟じし房とおへておまに
花一本みて本みまひむ春に
かくのたくまりて呼あるとなれ おもへも春と
ならぬのつくとはくとよしとれ
むかしの事の哉 見する柳に 色の柳にと清く
梅の下テ川 みのこうまり つくりにくとゝめ
○ 何まにおて暴の涼乃蜻蛉に

誰ゝ角めにむしさき深き堇に
如是上午 何 誰 なそ いて いつま いふみ いふそを
ういひ捨て 哉とい留りれ吟して志るし
何ゟの印 於ける 郎松に
上の何というふ字と於て いふ字のまゝつけて 哉とい
留まるや
何の事乃字とも志らぬものに
是何といひて元とも志る次疑ひ之して 哉と留
まるや 蜻蛉 菫の哉と留まる 吟じて
おる亀し
芭蕉翁には何よ何ゆるや 秋の風
是何と云又やて疑ひかしして何というふ字の引ますを
示字のつくちにのあかなし ゆゑの絶るなき事し
何風の吹かぬ日ぞある 桔可申
大ツ 梅之

やうにて哉と思ふ所あり　何と
解て哉とは思ふ　詩文の哉あれ
ども此句全体疑の句
を主結句結ともきこゆ　又下
学問の道廣し　結句
学問の道の如く　何れのきわも廣く結句学
へるなく　何れしいつる所の義を
入てこそ　何ともそなはらぬ　山を
なり　何ともそなはらぬ　為能
実に体　結句文字に書遠侍るべし
孤山は何ともなき　何も字是
実に称とは四季の詩也　詩句
すると何ともいはぬ　詩句
合点しまりぬ　文章は何ともなき
ちてい何ともなれ　詩句
手法なりとしても　俗語のより目ひきるいてきあき
まりて

哉と問ふ詩なり　○哉はかなしなどの
○深山より出の景吹来あ山風は
是は吹来あ風と　詩句
○て　詩句　なれもり　なるなり

○拾五のやうす

題のや　学問や　柳のうしろ義の
詩のやうなる　詩句や　俗語や　のごとく
○古来より　上文なるなふや　とて　中の七字月雪を
詩意や　国中や　雪田のうへ　乃雪の
景中や　夏の　の新しい　あるやなり
のやう　春柳や　春行や　吉野の雪や　雪なるやとて　哉
○てもなるや　又義あるや　月あるや　なるや
けや　柳なるよ　月なるや
たのや　今いくやこいしと　月なるや

祢義の句　濃色や大かたすけふ初日氣
いうもも祢ぎ色しる
切句　ちるやの月ふかきて海ふる

嘆息句　おとろひや蕎麦喰つて海苔の祢
いうもも惜ちる色しる
墓捨て墓ちるとめくるや初冬
是北枝の句に祇義の墓よりて生ずるもの墓捨
て門に入るきしも今い墓捨て墓とめくるや と
嘆息きてるや の文字あり 此の極乃やしる色の
られ彩ら古人の為ちるも当時の人の冬ちるも嘆息
作を祢義 ありて 行くまりて見る色
口許六曰かれよりちるしるも有 墓の追悼
年ちるの墓捨て墓とめくるや と 嘆ひを行すそ

嘆ふ叫ちる自然ふちるの為と
五老井ハ嘆ひのや ふしての用はあり

乾ひの句　蓮葉ふ中ちるや侍婢の初使
吟して ちる色しる

拾句　牛の墓女乃めのもはやや
顔の句　如是上ちる ふ葉ふき五文字と居色しる 上ち
切ちるあり
一下里ハ皆花ちり乃子孫 や
是嘆ひ拾るやあり 上ちるふ葉ふ切れも 皆と
いつちるちるとおる色しる
ちるり拾て末の実葉の実拾ちや
是乾ひ拾るやあり 上ちるふ切れと中七五字

白糸毛おきうて居る屏　又額のやうな
かくしてもの有のさつきさしこのきや

下知のや　水うてや埃もなくなし
吟じて居る屏
ヱケセテ子ヘメヱレナソ　是下知の白糸毛おきうて
出よ　つくせ　すて　ふけ　青き　ゑふちも　入よ
のくしひかり
口かすみ月　又下おろり

菱のや　芝里乃菱や　菜籠や　羽　鹿
みなしらのとおしあり屏てふり
あやや　世や海士　捨ものや　時　時

きつねや　いうあしきき　音や　あるまの　捨笠
中のやとも　上六八まめ　降や　先くる　きつや　狐　入　あるひなり
定家卿や　文字　あるすのくぬし　作られしと
先笠　みや　やうりて居る屏　音や　霰と先
後鳥羽　又下よ　のきや　又降る　合よ
きつや　雪　霰　月のうて

口会のや　上より二つ目　七のや　吟じて居る屏
狐と　白い　一代の　おきり　みたる　切るなり

はるのや　世の　様子　あるぬ　古盆子
吟じて居る屏　口会のや　切るも　あるか　かきく
狐と　白い　一代の　おきり　みたる　切るなり

老もふてくる人のやをうまりて我も留る
又今て来る迄し　鏡のや　人の世　うつりてきて
又初なり　白く咲してきる迄し

影や梅　花うつるうめ池の水
月やのこる　水うつる時あききたる

是は人のやあり　我あるこゝ山やの家井　うつも春
白ゝ　あるあり

思ひやしの事も人を鏡ひて
○是すこのやあり　此すより　四月あり

鏡のや　人やまゝ　柳こうし　雪の色
咲して　初る迄し　春やけり　雨後の新ひこ
旦ゝ鏡ふ　二月　柳　そのなむきい　汗鏡ひなり
○まゝ鏡ひこいつを　まやうら世　夢やうま

君やまつゝ　なる　新ひこ　人の迄し
○秋　鏡の外　作この外　我こかふ外　柳
○旦　鏡こふ　ハ　切ふ　こ

西のこ外　外の　ふもまる　月　ふ　忠　誰
長　外こ外　月　こ　こ　ハむ　こ
是作この外あり　此外　ていハ　ている　我こ　夢　アハ

拝礼や　春あり　や　石こ　あき　山の　霞　霞
咲して　来る迄し

按のや　旅をして　見　や　海　世の　孫　拂
咲して　来る迄し　まつむや　とく　咲て　来る　外こ

立ちて雲や霧の如くなる日のいりて
山の生い茂りや木の葉あるよう絶て
見たさこのやく　言し木の葉ふと枯しきらのと
やのはたさこと入きて　でうあるく　言葉又同
なあるるていてし苔かしこい
○又九やしいるるいり　初め九つめ有り
暁の如しや綿を夢見て
仮枕むすぬや月の絶て来て
叫やそいはでも　ぶらる　面る有り
星崎の岡と見んよりや時雨
是同りけりとあ義ふと云ひして寄る屋

腰の　黄鶯ふこたるし初や来る
梅のやうに咲やうに　やの生大神
よのなるかふしるる梅のやをいよし　よう
かよいぬるあしい　こたるし彩や　こたるし彩よ
如是咲して寄る屋
○梅ひやしして梅ふや文字なり矣し梅のやを行り
なるのや梅白を味ひて名味を寄る屋
以上

△　馬琴カ歳時記ニ
引捨のや　近江歌や伝説歌や　此歌ハ世ぬなりとあり
はく　てハ付づくしくしくしく　又ふるふかふふてもふ
見ゆ　ウクスツヌフムルウの字を上ふおくれハ字くれ
そ　ケルナルアルなるるるる
ゐ　そそしるるるれしし
あり　なるとかるふ又ふるるるるるあるる
かしをもぬるふかあり又ひ梅くるるるもあり

やとしいふて拾やとりぬり　美名屋

行年や秋よりふる数をかくしりて

年の暮や狩川は見しい諸あり

是のもとにもいとゝ白とやと墨てぬりぬり

とゝのいあ〳〵ゝ有て紙白ぬれいとてんのあるして

白紙にて喪見のやふ沢を書のやい一代の白ふ

ゝ沢にて喪見のやふ

ぬやと〳〵

つゝれ笠めゝ中のうちて。ぬと笠迄も　下のぬれいきれん

○やとてふたゝやとりぬやとりぬ

ちゝしやもゝゝや

芝笠いた集も一白見えぬれて行ゝゝめし

ゝ沢のふすゝ白ゝのゝ沢ゆゝうさやといふを

ゆゝうやいふるゝふひふ行ゝゝやとんぬゝ

○祝いふる哉乃ゝ

おりの哉　奇蕉翁　河内国ふ　奇蕉翁

ゝゝ白きを初ゝゝを書れゝゝ古集も

一白見えぬれゝも芝又行ゝやゆめしつかふ

白ゝ沢隙を折て書る白

○ゝさ哉　蕉さ哉　芝笠のゝゝい　ゝさふ

蕉さ小ゝゝ　十ゝのやを皆入用のやゝ

越ふやを白用のやゝ　一紙笠迄も白

ぬゝゝりて雪西車ゝ笠方悟さ小

芝笠いゝゝさふゝゝ　悟きのゝゝさ

白ゝ　冬ゝて志ゝ白ゝ　作ゝよゝ形り

○六月七日の事

元日より毎日こゝに来りし
義うもて人のあきこゝに来りし
出の言ふ深き冥ぶそ思ひ
見たるもけ　花下に来りさう和　それ下に来ゆ也を
出花と上るいつ時ちを下ふ　工ケセテ子ヘメ
工レトトカるうけつてくるこゝに来りし　出花ちを乾
あとつつ時い俗の所とるりし来る尾し

○人まこ年十日の白を第ノ花
お考菓法付ふ行りし人まこ年十日の点ハ所れと九
文字ふ中ゆるありし来る尾し　ふ下の白を
晴てもこ年月の貴教として別
絶句ふ出して所りあり

雨の霞菓をこ年あをあら先

出花ちの時（五月五日）
来まちふ五月ハ来ちを人ちを
きのあこ年さあ（ちをしつけつるふ
丁花ふ　ケルアルあていをあるる
花としてケリナリとハをあるし

○ハ字三月ハ九月ニ
ロフスツキツセツしるこ

冬ふ小之ちの人命ちもう子
忘れしのり来ていをいをいを
をそれの歌の花ふの来のふ
花ちをいひちあつ
こそをの長ふ日の乳の子をけす
○十九日ふ菓ふの傳ちて
神ふこ年ちきる花おる乾ふ
忘れしこそ人ちもうげせし花ちて
遊ばれたこ年を庵の来る花

○十五日の事

元日より毎日こゝに来りしが
義理もて人のあきこゝに来りぬ
出の音ふ深雪ぶそもつかぬ
昆布さそもつかぬ　花しゝ花ゆさう和　それしゝ花ゆもを
ゆ花しゝ上るいつ時ちを下ふ　工ケセテ子ヘメ
エレトトロトロようけつてしくるこゝに来りし　ゆ花ちを
ゆとつつ時ハ俗の所てとゆりしゝ来る夜し

○人まこゝ花十日のゆ月を第ハ花
ゆ考菓法付ようりし人まこゝ花十日の点ハ所れし九
文字ゆ中ゆ中ゆ考りし考夜し　ゆ下の白てし
晴てゆまこゝ花自の貴敬として別
絶句ふ出して所ゆり
雨の霞菓をこゝ花あをゆふ先

孫ゆ　一切みけやハ切ゆ孫のやとゆて
新芳や文ゆ切ゆ孫ゆ切ゆ孫ゆ
けや俗のやて切ゆ孫ゆ
ふて孫ゆ
用乃の乃乃ゆ
名れバ花を花けきけ人のゆんやふーやのさざめふれた
ゆれしゆりまゆていふゆ人のゆんやふーやのさざめふれた
の、字三つハ花ゆ　ヒロツスツ六ツセツもゆ
名れの歌の花ゆの花ゆの歌の花ゆ月の乳の花をけ

こそ生の長ゆ月ゆ沢
○十九日ふ菓ふの傳て
神ふこゝ花ちきゆ花ゆ花ゆ
花ゆしこそ人ちゆげせし花ちて
遊ゆれたこゝ花庵の来ゆ花

○六月廿三日の事

元日より毎日こゝに居て所用なれ
共まゝ人のあきこゝに居ぬる
出の音ふ深夫冨ぶそもつ何ぶ
見さそもけ　花てゝ居さう和　それて居ゆゝもを
ふ居と上るいつ時ちを下ふ工ケセテ子へメ
工しとトりまうけつてくるこゝ居りり　ふ居ち敷
ふとつつ時い俗の所ちとるりし考ゝ屋し
○人まて居十日のふ白き筆ふ花
お考菓法付ゝ行りり人まて居十日の点いが出れと九
文字ふ中ゆ四ふ行りし考ゝ屋し　ふ下の白ゝ
晴てまて居月の貴敬しして別
絶句ふ出して所ふ行り
雨の霧筆をこゝ居あをゝふら先

炭賞のをのう書て居ゝ先
ちまたて居あれちるきすの中れの屋
されてゝあれくきゝ考ゝのと花のふをこあゝ屋ふ
○久ゝをの考ゝのゝゝ考ゝ屋きゝ考ゝの日ゝ考ゝ屋ふ花ノ
ちるら居ゝもいうて花のちるらんといゝてのちゝ屋を
こゝ考ゝ屋しして古今の作ふ入ゝてゝふり
五今帳ふ始ちゝ所ふてて居神の月
花ゝ考ゝをいひちゝふつ行りて居をとゆふ考ゝ屋
こゝ屋ちの考ゝふ入ゝ所ふ次
○十九日ふ筆ふの傳て
神ふこ居ちきゝる花おゝ屋ふ
考ゝしこゝ人ちゝげゝせし花ちて
遊所れちこゝ居屋の考ゝる花

右なそへいひて　哉とも　てにをハ留りて
こそ切れと心ニ行やりして働くなり

●指示乃事
石女の雛かしづくぞ哀なる
菖蒲黄日和よ菱を茂りけり
如是情くそ　指なり　指示れ　なしと云時を
体の所ことなり
行春を近江の人とおしみける
是ハ近江の人とそと　その字を句中にこめ置し
その字にこもりたる故に留るハあしし

●飛指乃事

盃下流ぶ流し指むる乙き
流る流しそてハ　流る流よるとハふよ不案なり
ここのる笑ひそ　ふよる之しそて　乃教ひなり
又よ打そ　留まそ　あしとて　抱の字あってとも
句情きるよりて　ハよ打る　引き留ると定めける
まり句しかるまし

●句中乃切
世継き代りし小田の行衛哉　桐葉切とも云
人に家を買せて我ハ年忘
ぬけからにならひて死ぬる秋の蝉
暁をむつかしさうに鳴かハれ
是等ハ切字なしといへとも句中乃切なり

式部卿宮古今和歌の撰ばれし時の仰せ出でられ給へる
に一首の詠み侍りしなり
許六日四十八字とかや皆仰せふるとて俳諧
を又一句の詠み侍りしそ
物の哀やむむ時間の詠める月
色白妻の仰せ　仰の一字より
世界をこめて自然の仰せ　一句の言葉うるはし

○て留の事　　まて留

幸時の仰せを筆より撰まて
是歌の仰せ　仰せ　詠ける歌　撰ばれ
歌の心を思ひ給せられしまて　世に伝る
幸時の私　私の句　詠ける
幸時の事を　歌を　見侍しまて　幸時の伝

発句を俳諧の句とふるを生て筆より見れハ発
ハ句なるなりしを志賀と幸時の四師会より曲節
と混ひ来る句しして　詠る句を句を
撰歌と詠りて八筆を法言して参る
句なる筆より　句を法言して参る
句変言して　句なれハ句を詠るまて
○仰字の字　歌　て　ふる
句を撰へり　撰へ　ふしいふハトノモニ　秀句
ぞ　よ　カ　ふ　て　と　る
うきそしふ滝よ世を捨て
里人乃山を降りて雪待て
○て留を撰字　て　ハ　歌　ふ　句　句　歌の時
ヲハバモ　カラヌ　サヘ　メニメ
凡もあき筆を　を　筆　の　歌　て

又よその根元のちり風まて
穂てひふあひのあしだ気まて
川よりふふとふも根まて
変したゟのしぬ合まて
○下の句て留め大底元とち切也 但し上より
十字目ふ引 八 乃字とり(し) 九より
譬の錦山ふ花ハみりて
松ふ霞るる月ハのこりて
両みや月ハうすし ゟ

○い川乃てとある事
尤も川の上の山を御しそ

右里元い川こむしみ流らひて
右の嫌は前の数乃字続りて
右いつれも初を休し定めたる行留る所まで
留まく その外もらいの数なるそ今字を私也
とくにつらりまで でと留やく
○発句哉留 またふかよひきる句
梅さく香とまり水の流のみ
水浅く根いふる芹の野沢
右の句 流沢 と流定しつる句と加へ
の発句乃数を 書ても留めをせぬるとの句
尤発句乃つのしによりて数ひらるとち河を聚
いまいふ所元まてを 引て留くましくの次発句
よりし終りて乃上旬を 行留し
○下の句で留 ○不留めさ事

みくさ　ふる　秋　乃　花を　ふるまて

萩の花　ゆ　て　みくさ　と　下より　よく　ロて　てひ　ふた

ゆ　ゆ　次　　初　の　ち　上　も　み　字　と　字　面　で　下　と

て　と　ゆ　る　う　し　　○　ふ　面　た

同　ゆ　き　を　ふ　ま　面　伸　一　下　て

ま　も　下　り　よ　く　ロ　て　て　し　○　上　の　る　ふ　面　た

除　て　け　て　出　て　れ　ば　馬　の　姿　し　け　み

捏　字　ハ　し　よ　る　ま　た　ゆ　や　次　捏　字　を　て　面　る　者　と

○玄妙乃切　同　ニ　ソ　ヤ　乃　ま　ま　字　す

あ　う　し　と　ロ　を　波　ま　て　よ　妙　の　ん

ま　い　切　字　も　ま　く　ま　ま　て　て　一　白　中　を　う　ゆ　次　爺

ら　る　後　と　考　る　を　し　　

れ　ま　し　　○　ま　ら　ま　て　ま　ら　ま　て

ま　い　し　ま　や　ま　ま　や　ま　ま　り　か　く　す　ら　し

ら　中　切　字　を　つ　け　り　又　引　の　字　入　て　も　や　と　切　た　る　た

同　を　ま　の　ま　る　し　　○　同　を　る　る　て　つ　く　字

既　を　る　る　も　い　ま　や　て　そ　な　の　を　の　世　ふ

人　と　今　し　ま　も　き　う　な　る　ま　ま　り　て

い　ま　て　と　ま　て　も　を　ゆ　る　し　い　ま　て　そ　ま　て　き　ま　ん

ま　も　き　し　し　と　た　切　ゆ　る　く　ま　も　き　と　ま　て　き　ま　す

○遠ひと　を　を　を　初　の　を　　

男　ま　て　人　を　と　は　し　る　た　笑　く

老　い　な　ま　く　き　め　を　み　え　ん　く　き　な　ま

あの花ざかりをさえして
老のあしもとにはいかなる
とはしいかなる月にかはつゝなる
ゆえんいかなる月にかはつゝなる
かなしいかなるといはつゝなる
やまとしいかなる月にはつゝなる

大過――乃事

あふみなるみかゝみの海
雲たちまよふ乃ゝ
をいかなるの心にいかなる
なるゝとなりてかはるゝ

下ヨリ上ヘ心ノマハル逢哥

若田部の家のすゝしさも老のぶのゝ
みすみの山の名をかりて入すゝ人の
名をかぶる神代もきゝたる三田川の
らしの徒哥

老人の咲てもまさる徒ふるとうみふるうも氷そ
みよしの山の名をつゝもしらぬ
天の川ゝき川の底よりこそ

あの品さの俳うとさえして
おのかもと人は考やのきぬ〳〵に
きしは切字 則はつゝ字
又こゝは切字 則はつゝ字
加 切字 則はつゝ字
や 切字 則はつゝ字

大過――乃事

あかるくしてあのみかゝる動作
雲たゝる風乃色はし秋の月

色切字の心して切ること上下のかゝるあり
切るあるとなりて下も動詞となり
きたらんとして下に月と切ること歌全を大過

とゝろく

タゝラ子と歌のあるを大意なし
色は久しくして下に到とあるは前尾世代よりて
大也――ふるくさるし

城おハ――

禅あるる人さんなりと着衣は更
色は城の中のうて家いかゝる技術ある名人歌を
と一名の事情をまはしてあり 城也――と色
きうて考ふ意――つきまのと意幸

三はし口傳
現在　ちらしけり　きせし　きよし
　　　ありしけり　さいけし　けれ
未来　きゆらし　きえらん　近らし　近らん
右現未乃二段ハ切也但イキシチニ加ふ
過去　近りし　とうろし　きとうし　きとうし
　　　きよわりし　きよかりし　是ハ不切
うら山し花も切とき桁の窓　現在ノ三
佛より水影に近し紙切　心
花ちりもものむしにあらし家桜　之
麦喰ひし雁も亦ひしき家の春　過去
拔へし竹のおさかくしけり　冬

切乃名稱字
雲とらん　　　ねざさ見ん　　　花も見ん哉
雲とらん花を桃梅ハ梅の字
枝も有も稱ん花をもとも字有也
又
雲とらん　　　花と見ん　　　山と見ん
是等の字ハもとて稱の處よきなれ共一
花とらん字る　雲とらん有まし上は花家哉之
花ともん桃字をとこさま見那
ゟ稱にいてるときかすよりて能し首之但花哉
見る通き桃等て未来とさして云によつての字之
用有とん哉　用ありとみえしも同し吉ク稱ア
口字稱字の處の句
　何りとそんおとて身とも生きらん
是ハ今年落之　こ度とみえてそん承とて身をも
生きる哉　まても過てよし　やいとひてても

[illegible]

○又[illegible]るハ[illegible]

○一[illegible]

[illegible]

○さ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○かき[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

●奴留乃事

天地ハ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

●不ぬと云事

[illegible]

[illegible]

雪ふりて[illegible]の山
雪降て[illegible]の山
如是の白化をいまだみるなりて切く
○ふりぬるとそ[illegible]
花ちりぬ　　[illegible]　　月ちりぬ
如是い切く　又曰　実ぬる実ぬる　[illegible]
○かくまぬるとそ[illegible]
きえぬ　　おちぬ
如是いまだ[illegible]
○不分明乃ぬ　　そいかくまぬ乃[illegible]
晴ぬ　脱ぬ　果ぬ　拾ぬ　抓ぬ　内ぬ　言ぬ
消ぬ　乗ぬ　尚ぬ　もぬ　為ぬ　寡ぬ　切ぬ
不ぬ乃　ふぬるとも　[illegible]

て[illegible]り[illegible]と[illegible]を穂子出てまぬきて　乃何
その[illegible]の　苅萱も何をまの[illegible]
そいかくまぬ[illegible]
そしふる　　未机
ふる[illegible]の　[illegible]
[illegible]
[illegible]　　其角
よ切　[illegible]　　鬼灸
[illegible]
[illegible]
[illegible]の　[illegible]
[illegible]　　宗祇
[illegible]
[illegible]

[illegible]

如是の白化をいふなりて切く

○ふぬ　[illegible]　月ふぬ

花ちぬ　[illegible]る時ぬ

如是い切く　又曰実ぬヲ実ぬる[illegible]字隙をぬハ切く

○加[illegible]ぬ[illegible]

きえぬ　おちぬ

如是いまゝ[illegible]

○不分明乃ぬ　そいかゝ[illegible]ぬ乃[illegible]

晴ぬ　脱ぬ　果ぬ　拾ぬ　形ぬ　内ぬ　言ぬ

[illegible]ぬ　乗ぬ　高ぬ　白ぬ　百ぬ　寄ぬ　切ぬ

不ぬ乃　ふぬ[illegible]

きれも　又切も[illegible]

又曰　刈　トル　[illegible]

●波、面乃事

逢ふなり　番[illegible]と鞆の[illegible]

上の白乃時を　なり　刈り　山字と[illegible]字のるして

はし面のやし　下のるうを[illegible]字のるくるも[illegible]

な上乃白は波て[illegible]ぬさるるく

●見由面の乃事

う[illegible]乃はきゝ[illegible]

く芦乃[illegible]

す無を[illegible]

川[illegible]

ぬ　山の色まさしぬのしぬ　見よ

ふ　みとりの色よ染るのとふ　見よ

む　み茂のるつきるをしつむ　見よ

ゆ

ろ　うつるまゝに月かくる　見よ

○たゞの仮名　此和名は　てにをは と
け留め　あらし　ふしいふもの也

△帆かけ舟の あとひより見ゆ　某法師より

●かも 留り　かハ留り

浦よりみぬ 岸乃花を見ぬかハ　皆かも恋し

浦よ摘る 花乃香を見るも　皆かハ恋し

右等の事をまるにハ　かハよし

舟まゝきるまゝハ　かもよし
名もなき夕のハ乃ながれてながる遠し

●むのふも　ここ色

住吉や長井の浦も ものまて
小篠さへ志けりし峰の桜まて
けさくもと ぱもおかよふし

●帝〃称 又

又あきて名をと云ふまし鹿乃都

●地　又

又もつみぬ 秋と おもへむきこ花

●成　名ル　さくら精の入ちる知らせ顔し
櫻よりも花にさかりの吉野山

●八字題
さくらにも花をこそきたれも

●七字乃曲
花の後見れども花は川も風に山
あら皇地よりやとりかへれの山

兼載
宗砌

〈下知乃事　ヱケセテ子ヘメヱレヨナソ

出よ　深虫よ花乃木の葉みなそのね
ばらせ　深つくせ花に我むかしこ乃行脚ゐ
はて　白ひ出て拂ふ船やして雪の梅
ぬけ　ぬけ花花あきてその夜ゆつるぞ
こゝろ　み尽きしあさのしぶき水の雪
花ふふ　咲ぬ月に花ふふ花をまその雪
え　梅さく舟とふうた身ま志ある花の風
ちらせ
こよ

通用切字の外　但連歌の格

咲えけりに清き津ある庵
いけも見えし花の美見のうす枕
雨そ花深き遅き知らる袖さそふ
露や色花の種乃紅葉けり
咲るや八和唐の小車哉
花ちる月山陰志賀志賀の浦
月いつみ水のもと寛乃松乃雨
秋の色をかへし前に帆
今年まで何の水すいつる花
露も庵と雪もいくよ孤栖蓑
後りまた乃和の花月更時々

花を見川もまきときき秋の草
名見中乃あるてぶと雨まさきれ
紅乃中乃死乱るかふ乳
かハいつみいかにいくたびぬ
さんてん　難し　とかくぬ　下知

夫「成すり」と云ふきを「成すり」とするハ或説に疑葉なり「成すり」ハ万に一つのとあそぶ　との字書い方　五義あり　此知るまて蛤の世とハ成すり　与近江乃人とおもひける　作得せるそやける
　名作例なし
代　花とはしきるその一離　又きものを斥てと一つ脱　和に不屈心懐と中の恐りあり
それハとてもふ思合なり　亦雖是ハ濁る　との字をいみ明
らけし　との字乃義何事かの　大様ハ祝
西上人吉野山花の盛になりけり山のそこにかるる白雲と云ヒ
古今にれ中て狍に野林に吉野も花の盛と詠まれてよみしハ　浅ましうさや

◉二字をかしらとする

前句のやをとりけてとめるなり

◉三字かしらとする

二日月をとて　赤とつけ

光しいつくも　下の安をとりかへる

光をものやん　川歩者もなし

下の安をとりけてとる歌として

◉四時不同の事

前句をかしらとする風を波とかへる

◉すみのえの名を葉乃とする

はるかすみ実の山風。神をえて

杉をもてる奥乃山本。日をけして

芝山をせよ神とんかなりて波のかするなり

山もとをとめて日をけしてやるなり

同じものの

萩乃をの河乃の橋をて毋とあて

芝いかしくは一句はをとめてしかるべき

ぬきのえのあををあるよりて橋をとめるなり

よりやすくしるべき考なるべし

●や哉　や意　茅ヶ崎ヶ出ヶ来ヶれ

名所　旧跡　人名　伴神　年月日

二季合物

芭村曰　あるむつ[illegible]に伝名きしやな
字義ヶ害ヶ[illegible]ましてアまよ
梅咲ぬ[illegible]れうもやうあ[illegible]
雨勢ヶ[illegible]の四ヶ[illegible]ほうつ[illegible]て　茅

〈重ミニナリセハミニナリ又語路モ耳タツナリ

〈新撰大和詞

梟（ケリ）　鴨（カモ）

茅トハ来ノ通畧ニテ万葉ニハ敕トモ用ユ尤物ノ従未スル意ニテノ倭ニハ決定ノ詞ト云リ

也（ナリ）茅トモ　茅也トモ助字ニツヽク時ハ論ナシ

鴨ハ倭ニ　平（カ）麼（モ）ノ二字アレハ其訓ヲ假ニ及サウン

止（ミ）　已（イ）　二字和ト漢ナリ

止ノ字ハ有（テ）語ノ終（ルトキ）止ム為（ス）語助ノ辭ト然レハ

也止（ケウシニ）ハ　梟止（ケウシニ）ハ止ル言ヲノ義ナリ

已（イ）ノ字ハ韻書ニ止也ト註シテ漢ニハ同例

・や哉　や意　前より出多れと

名所　旧跡　人名　佛神　年月日

二季合体

君嶋や矢刺乃鶏の永き引　士朗

[illegible]

〈尾陽士朗門人ニ教曰

庭（ニハヲ）　廣（ヒロケテ）　野（ニ）　作（ツクリ）

是所要ノ手ホ葉ナリニハヲノ三字自然句ノ

重ミニナリセハミニナリ又語路モ耳タツナリ

〈新撰大和詞

梟（ケリ）　鴨（カモ）

梟トハ来ノ通畧ニテ万葉ニハ来トモ用ヒ尤物

ノ従来スル意ニテ倭ニハ決定ノ詞ト云リ

也（ナリ）　梟トモ　梟也トモ助字ニツヽク時ハ論ナシ

鴨ハ倭ニ平（カ）麼（モ）ノ二字アレハ其訓ヲ假ニ

及サラン

止（ミ）　已（イ）　二字和ト漢ナリ

止ノ字ハ有（テ）語ノ終（ヒニテ）止（ム）為（ス）語助辭ト然レハ

也（ナリ）止（ニ）　梟（ケリ）止（ニ）止（ル）言ヲノ義ナリ

已（イ）ノ字ハ韻書ニ止也ト註ニテ漢ニハ同例

二用ユレト爰ニハ左已ナト和訓ニシテ尤一
字一用ナリ弐ハ而已トモ

所　社

所ノ字ハ指ス物ヲ訓ナリ　月所　花所
万葉ニモ君所トモ已所ニモヽリ但白中ニハ
社ノ一字ヲ用ヰ白結ニハ已所ニ社ノ字バ
カリニテスゲナキ故ナリ

也　成

也ハナレニナリニ尤助字ニクミ合セテハ
也乎ニ也欲ニヤナリセイナリノ差別ア
レニ成ノ字ハ助語ニアラズハナリ

弐　耶

大意ニゴレハ顔ノ弐ト云清メハ決定ノ弐
ト云ヘリ浮弐ト云時ハ一人ニ歎息ノ氣味ア
リトヤ云ハン

麻

牡詞疑テ未定ノ詞ト云ヘリハ花モ鳥モナ
ト訓スレハ物ヲカ子テ疑フコヽロナラン

好　ヨシ　スノ

物ヲ愛スル詞ナリ又好去ト畧語シテ物
ヲ捨置ツコトハナリ

那　也　奈

尤快那ハ尤ヽ人ヲ詞ニテ　左様也ハ昔ヽ人ヲ
詞ナリ尤様那ハ疑ニテ　左様也ハ決辞ナ

し八真名ニハ此等ノ働キアリテコヽ那ト
已トノ差別ヨリ同語別用ノ例ト知ヘシ
或鬼禁ニ同禁ニ例ニ禁止ノ詞ニテ万
葉ニハ往禁ナトアリ禁ノ字ハ禁ノ畧ニシ
テ句下ニモ句上ニモ用ヘケン

反 反

真名ノ伊勢物語ニ　人反被知　我之通
路トアリ此時ハ人ニ知ラレヌル支ナリ然モ
漢文ノ字配ハ為被人知　下ニ置我
通路ヲ人ニ知ラレヌル支ナリ　人不被知
ト上ニ置トキハ人ニ我通路ヲ知ラレヌ支
ナリ人ト知トノ二字ノ間ニ語ノ間ノ無ト
有トニ考ヘシ

右言語ノ部

文句之部

尤左　尤有　發語ノ文句ナリ
漢文ノ左尤トハ後ノコトナリ　和文ニ尤猶
トハ前ノコトナリ
作麼　厭麼
ソモトハ其麼ノ畧語ニテ前支ヲ逆又反語
ナリ抑トハ字書ニモ反語ト注シタレハ厭
麼ヲ重タルナリ
誘引　不知　去来
不知トハスムナリ否ノ通語ナリ誘引トハ発語ナリ

是等ハ真名ト一ナリ
率
イテトハ物ヨリ彼ヲ催シ誘引トハ彼ヨリ
物ヲ催シテ自他ノ差別ナリ
這 頃 者 スハ、物ヲカヘル詞
シヤハ物ヲサス辞
者ハ隔異ヲモ即物ニトモ
敢 敢所ニモ 敢社トモ
不敢知 不敢 経書ナリ 去ハ敢テノ畧語ニモ
最 彌 痛 尤
最イトヽ訓シテ彌與ト訓シテ弥ノ畧語
ナリシカレハ彌最畧来ナトハ

痛那 痛與 通畧ニヤ最モアトモ寂ケ両字通用
尤モトモトカム 漢ナリ
惟 唯 只 但 徒 直
惟ハ心ニ従ヒ 唯ハ口ニ従フ 只和但ナリ 徒イタツラ
直地ノ畧ナリ
叔 苟 剌 孰 強 殆 寧 復 枉
愁 卿 頗
叔ハ尤様仕而ノ畧語ナリ 苟ハカリソメノ 剌副ト助字ヲ加ヘ
唯 俞 諾
男ハ唯ト答ヘ 女ハ俞ト答フ 否乎
諾乎ノ返答ニテ 唯トハ無心ニシテ口ニ答ヘ諾
トハ有心ニシテ意ニ答フ 諾トハアヤナリ但

古訓ニハ應トアリ　唯ハ夢トモ　諾ハ早シム
アトロヲ用テツトツメル　ツムハ男女ノ強弱
ニシテ　男　女ハ　和訓ナリ　漢ニ男子　女子
トヲノ字ヲ用ユル

候　侍　陪

候トハ何候ノ意ニテ侍ノ通畧トソ然レハ
三字同意ナリ候トモ侍トモ　陪ニ

副　尚

万葉ニ影副ト云ヘル添ト副ト通語ニテ増
テト意ヲ重タル義ナラン　尚ノ字　君尚ト
訓スル

面　強

ツラシ　ツラキハツヨキノ通略ナリ

馬喻

叱トハ制ニシテノ物ヲ停ル意ナリ
嘶トハ蹂イテ先ヘ行ハヅ

見　ミトハ物ヲ試ミル畧語

殺　和　綴　回　通

殺ハ思殺ラクハ殺ノ畧語。和花和濃和和ノ
中畧ナリ。綴キミツル綴ノ畧。回メカキトモメシキトモ
為拈回　回タルニ　回ノ下畧ニヤ。通カハシカマシ　慙通
可笑ハ古例ナリ　不顕其文ニ心ニ通ストヽケシ

馴来　来ハ助字ナリ

ミルナラク　キクナラク　見馴　聞馴ナリ

氣數

静ケキ 寒ケキ 物ノ氣味ト物ノ氣色
ヲ云ヘル氣ノ字ノ助語ナリ

許

妹許往則トアリシカレハ暗許ニ 又
有暗 有明トモ リトルト差別

往 行

往ト行トノ連續トハ行ハ多用ニテ ユヘニ
ヲユナフニ アリクニ 紛シヌ則往ノ字ヲ用
京詞ニ往遺利 往ニ 將往 為往ヲトハ
浮言ナリ 將往而来ルトモ 將往トモ云ナリ
然 爾 爾所 爾云 爾止 爾有則 然則
寔 茲

寔 許 上ニ返ル時ハ于茲 寔ノ字ハ下ニツラナ
リ又也所トモ

抔 迚 ナトヽ書テ撥テヨムヘシ

扱 噯 サハク 捌 扮 訛

扱ハ手ニ從ヘ 噯ハ口ニ從フ 捌ノ字ヲ
サハクトハ字書ノ訓義ニモ疎ケレハ
メヽキニヲ扮ト云イ 燃ロニヲ訛ト云ハン

嘸

嘸ノ字ハ不精明ナリト云ヘレハ何物ヲ意ヨリ
嘸ト推察ノ字義ナラン

姿 容 形

三別ハ和訓ノ意ハ同シケレトモ言端ニ強

銘目九品

弱ノ例ト云ハン

停留　諗　悌　色熟

諗ハ俗習ナリ

艶教　化教　混尚　雑ノ心　耻通　耻習

憐ホメタル習ヒ　慇ヒムヒ　衾イメミタル　懸云　云路

老矣　ラク心ナシメライヒ　悉云テフハ云ト云心ナリ

明　門ヲ同フスルナリ

友心ヲ同フスルナリ

註曰明友ハトハ手ニ手ヲ添ヘルコヽロモチナリトソ

能諧　非諧　非流　滑　誓　諧　徳　謎字　空戯

鄙諺　狂言　以上

凡字數ハ四万二及ヘトモ用ル所ノ字ハ

三百字ニハ過クヘカラス

程　又の字ハ　マウハリ　イヨ〳〵　なり

ゐんハ　ヌヘキ　ヌベシノ云　鄙の字ハ　テクシ　テクシヨヒ

いはゝ云ハイツシカ　イツシフト云　云ヒ

ちゝしハケルカシノ云ルカノ反リウヒ

ドの里語ハ　ツイヒ　ダニノ云ハナリに　ノ云ヒ

さんの云ヒ　ダニトムはるるかそうるヒ

てデモ　てデガ　モテタカ云ヒ

ダニの云ハナリトモ

ニデモノ云ヒ

まいハめりしの云ヒ　ヌんし

らしいらめりしの云ヒヌらし

ちらしいちれしの云ヒ　みちらし

涼かもけもハさそもの云ヒ

ヌヌルの里語ハテシマフマウニナル　テシマフタメ

お任ありり

鈴目九品

弱ノ例ト云ハン

[illegible]

羽（フリ）

[illegible]（ナシ）

[illegible]

リトソ

空戯

[illegible]

[illegible]

[illegible]

古法ニいぴ乃訓ヒいき
ひぷぺ乃二用ヒて喩ヒ寒ひたきくこ
通ひ思ひをふぺを通ふなや細きを
音通をひぷぺを唇乃一音ふ通ひて
いきくを喉牙乃二音ふ通ひ或を
暑ひ寒ひ
イキシチ乃横ヒも寒ヒ次加キクケの
堅ヒも寒ヒ次是を大和乃国曲ヒて
ひ字を不思議の助辭ヒ
つ
ちヒ命の口傳ヒなり

△上おノ字下こノ字上ニおノ字下ニはくを書カ仮名ノ法則ナリサヲユノ二字ニ限ス上下ニカメニ法有

源語抄　イ　井ノ

イウヘハセ　返答ナキヒ
イマハタ　今昇シテナリ
エダチ　立ツ居ツナリ
イキタナキ　子ゴキ　ナリ
イトナシ　イトマナキナリ
イクノタビ　何千何百度トヒコロ
イナビヌ　人ニイナトオモヒキウヌヌナリ
イヒシラズ　エモイハレズトヒコト
イナハヤク　コトノサトキヲヒ
イロヒ　注ニトリアウヒヒ
イキマキ　イカレルスカメヒ

イカメシウ　キツトシタルヒ
イハケナキハ　幼雅ノ時ヲヒ
イデ　俗ドレトヒ意イデヤハ強クヒコヒロ
イタツラ　万葉ニ仮用ノ字ヲカケリ
イサタマヘ　サアヒ後アレト人ヲサソフコトハナリ
イトマナキナリ　万葉ニオホツカナキヒヒ注ニ日コヒロモトアキヒヒ
イブセキ　俗ニ夜ザトキヒ何ハ孫ヒ
イザトキ　長舞ヲナカイトヨメルナリ
イツクシキ　忌ヲツクスノ義ナリハレノハシキナト
イキタラジ　生テハアラシトオモヒキハムルナリ
イモヒ　斎食ヲヒトモ　精ヲヲヒトモ
イカケ　火取ノコトナリ

イタツラニ　サスライシ人ナリ　イザヤ　万葉ニ不知ノ字ヲヨメリ
イボ元　馬ノイナヽクユト　イサラエ　雨后ニハカニメマリテシバシアル水ナリ
イカメシウ　事ヲ歳星ニスルヲ云　イツキ根　深田ノ内ニヒメヲキテ大切ニスルヲ云
イザヽメ　イハ弓浩くサヽハ挿小ノ義ヽ俗ニ二寸ト云コトシ
イシ　倚子ト云今椅子ト云天子ノ御座ナリ
イワヘノ扇　五重　注ニウスエウニテ五重張タル冬ヽ扇ナリ
ロナウ　附晩鐘イリアヒナリイリヤヒハ誤ナリ　云甲斐ナシナリ　フカイナヽハ畧ノ誤　怠渚　ユルカセハ誤ナリトソ
諦ナフナリ　勿諦ナリ

ハシリ云　フテハヤニカリヲモ　又茅ヲ云ヲモ云　ハシナヽク　家ハ夜ノアリルヲ云俗ニ台ザウサト云カユトシ
ハヒハタル　キタルナリ　ハヤノキタルノ名モ云　ハヤキ手ノ花ヤカニヨソホヒ玉フナリ
ハテカヽヤカ　カハハヨクテ　ハユル　延ノ字ヲ書　ハヒユル
ハツカシキナリ　ユヽロヲ云

ハシトミ　羊ノサヽナリ　ハラキタナキ　サモシキ心底ヲ云又ヨカラヌコトヲシテ心ハウカシキヲ云
ハシガクシ　日本元ニ陽子ヲ云　ハシタナキ　ハシタハ半ニ同シタトヘハ十有モノヲ五ツナキヲハシタナキ云
ハナヤカ　車ヲ引入所ヲ云　ハシタナキ　モノヲ五ツナキヲハシタナキ云
ハグロメ　花ノ字ノ名ニテ　又日カクシタルカアラハルヽヲ云ナリ
ハカナリ　歯ヲ除テ后　常ノ眉ニナルヲ云　ハナゴヽロ　色メテアダナル心ヲ云ヘリ
其年ノ菱ミヤスヽ則ハカナキコヽチニワツラヒテマカテチントシ玉フト有　ハカトハハカナキト云ヲ則ニヨリテ其コヽロヤハルヤウナレト　ハカトハハカラフノ畧　ナキハガタキノ名ニテ　ハカラヒカタキノ義ヒ　久トヘハ常年　児ニテ死スルアレハ八十ノ老翁ニテ堅固ナルカ如キヲオシテハカナキ命トイヘルゴトシ人命ノハカラヒカタキヲ云
ナリスベテ　ハカナキ　モノモキコシメスヽ　ハウカナル食物ヲモ
○又ハカナキ　モノナトヲイヘルナリ
ソハヌナリクメモノ
是ハ文作ヲ云リ風流メカシテ羽ヲ艶ニカケハセス
トイヘルナリ　枕草紙ニ
花ヤ蜻ヤ
ミナ人ノ花ヤ蜻ヤトイソク日モ我心ヲハアメゾシリケル

ニホヒヤカ　ヤカハ秋容羽ヒ　ニナフ　似ルモノナキヲ云
又無ニノ義トモ

二ノ町　一ノ町ナル町ニモハソレニ次モノ
サ后　大切ニセヌ一通リノモノナリ
ホイ　后ニツケル サ官ナリ二位三位マテナリ
ホヽエム　本童ノ字ノ音ヲ用テ愚ノ如ニナルヲホイカナフト云
ホノメヌ　声ハセデ笑ヒノミスルヲ云
ホタシ　アラハニイハスシテソレトシラスルナリ
ホカケ　モノニツナカル、コヽロヲ云
トキメリ　トモシ火ニテ人カケノウツルナリ
トミニ　トキニアヒタルサマヲ云ナリ
所セキサマ　疾ト云ハ特シナリ速ニソノマヽニナリ
チリハミ　貴人高位ニタリニ先ヲトナリカタキナルヲ云
チヽヌシ　塵ノツモリタルヲ云
父主ナリ　チヌシ　乳母ヽ

ヌカツク
ヌレキヌ
オヨスゲ
ヨサノハ
ヨユカマシ
ヨモテナセ
ヨトロシ
オヒマトハシテ
オフケナ

ヌカハ顔ナリ　地ニツクルヲ云　附離別　遠キヲ曰離ト云　妻屏ル離別ト云ハ誤ナリトヲ
ナキ名ノタツヲ云　同　酒オ己ノ中毒飲例ニ云
況マチ人ナレト　全オトナシキサマナリ
長ヽト云ニテ　専ナル意ナリ又頗ノ意ニ用ル所モアリ
ヨユハ怠ナリ　不順　不敬　又愚ニモ云カヽシハ助字ナリ
他人ニマヽエハ面目ナクヤアラントヽ云フナリ
ヨソロシキ心　又オトロクサマニモ云
オヒハ添ヲ追ヒ尋ル心マトハシテハ　マトウナリ
注ニ我ニ似合サルヲ云ト有。契曰大氣ト云ノコ
ナリハ添ノ詞ニテ　アラキヲ　アラケナクトモ　イハケヲ
イハケナキト云ニ同　一説ニ其所ノ分ニ任フホドノ
員物ノコトニテ員氣無ト云ニテ所ニスキタル
重荷ト云コトナリ

オボ元ル 而有
オユエノ元ウ

オモタテ
オヽシソ
ヲチカヘリ
オヒスガヒ
ヲナナシ ヲナナクモ
ヲレ
オボロゲ

オボエトハ似タルヲ云ヒ人ノ母ニヨリ似タルヲ云ナリ
注ニ行ノ労トイヘリ 葉ニ労ハ引フノ仮名ニテ
編ノ字ナルヘシヲユナヒノ ツセレルヲ編ト云編ハ年
ヲヘタルナリ
其ユトニフカリ入タルナリ
男ウシキスマヲ云
ヲチカヘリナリ
幸帰鳴ノ義ナリ行テハ戻リ変ト呼ナリ
追スガフナリ スガフハ次ヽ
オロカナル心ナリ 小児ヲオサナシトモ又コノコヽロナリ
風花ニヲレツヽトアリ 秋ヲヒク人モユノ春ノオ
モシロニハ心モヒカレテ春ヲヒカントイヘリ
オボロゲハ少々ノ義ナリ マレニ少々ナラテハト忘ル
カヨヒアヒミ玉フハ カヨヒアヒテミ玉フトハ心得ヘシ
カヨヒテアヒミ玉フトハ心得ヘカラス

オモヒキヤ
オチアフテ
オモノ

オモヒワケル子
世ニハナレ出タルナリ 扁房ヲ云
大床子ノオモノトアリ 御膳ト書テオモノト
ヨムナリ女房 ハイゼンシ 大床子ハ殿上人ツトムル但
朝カレヒハカリノメニメスナリ 大床子ハ礼ヲトヽノフ
ルナリ 膳ヲオモノトヨム 飲食ノモノヲ云ナリ 膳
トテ今云 ヲシキ 又ハアシウナナト云モノニハ非ス
カレヒハ毎月朔日節句ニ依ルヲ云
今モ折敷トヽテ食物ヲノスル方盆ナリ 木ノ
葉ヲ折敷テ杯盤トナセシ上古ノ名ノ残ルモノ也
分ナキナリ 人ト我トノワカチモナキヲイヘリシ
ヲシキ
ワリナキ
ワリナキ ヲハヒ
ワザト
ワラブタ
ニセツニ思フトアレハ人ノ思フ節ヲモワキマヘズ
一ヅニオモフナリ
幼少ナルヲ云小児ナレハ何ノワカナモナキヲ云
琴琶ヲヒクヲツ子ニ我業トスルナリ
和名ニ草ノ褥ナリ今云茶屋是ナリ

ワクラハ
ニ
ワダツミ

思ヒセヨラズト云カユトシ思ヒカケズ行合ニ逢ヒ
路ヲヨセメリ　ワクラ葉ハ木ノ葉ノ病葉ヲ云
ワダトハ渡ルナリ　ツハ助語ナリ　ミハ海ナリワタル
ウミナリト云ヲ　ワダツミトイヘリ北国ハ山ヲ越テ
行カユヘニコシノ国ト云ゴトク海ニワタルト云詞ヲ
ソヘメリ　ワダノハラナト　スベテ海ヲ云ナリ

カヨヒ
カシ
カヒ鼎
カツ
カユト
カタハ

コレハ其物ノヨク似タルヲ云
私ニ夏ヲ送スル詞ナリ　又ハツカシ　ヨカシ　拓ノカシ
ハ　カシラノ汁ヲツヽメタルナリ
カヒナシトハ　タトフルニ昇ベキモノナシト云ヘル義ト
俗ニ　マアソノマヽオケト云詞アタレリ
カコツ意ナリ　此ノ仲哥ニ神言ト書リ　拆云トモ
鳥ノ汁羽ヨリヨコル

カレノヽ
カラワシテ
カニナ
カサヤトリ
カコチテ
カチゴト
カヒノヽシ
カウカウシキ
カウイ
カンダチ女
カヒツモノ
カリノ子

ワカレ〳〵ノ上畧ナリワカレハナルヽヨリ生テ疎遠ナルヲ云
辛労ノ心ヽ辛労ヲヘテ　マウ〳〵ニト云詞ナリ
仮名ナリ　仮名ノ義ナリ
雨ヤトリヽ今ハ只ヤトリノヿニ用雨ニ用ナシ
借言スルノ義ヽ　カコヅケルセ
カチテヨリ云ヲケル詞ヲ云ナリ
其夏ニ達シテ　ナウマヌ方ニイヘリ
注ニ神々シキヽ　ツヽシムベキヲ云
更衣ト書官名ナリ　女御ノ次ナリ
上達部ト云官ハ幸相位ハ三位以上ノ公々ヲ云ナリ
貝ノ類ヒナリ
鴨ノ子ナリ　仰ニテ云リ
附偏腹痛（カタヅイタミ）　ハツカシキヲ云

カケマクモ

祝詞ニイヘル言ノ葉ニカケンモ畏多シト云義ナリ マリハ人ノ約言ク カケンモナリ

カミサビ 翁サビ

古雅ナルヲ カミサビト云 故テ詩ナドヨム殿ノ古風メキタルヲ云 サビノ サハ助ケ言ニテ ビハウリト云ヲ反セハ ビトヲ用ヒタリ 翁サビ又ニカリ

ヨ〻

ヨ、トナキヌト有ヨ、ハヤ、ヒ ダン〳〵ニイヨ〳〵近ク サマヨイヘルナリ

ヨロボヒテ

ヨノナガ

言ノ葉ノ ナリ

日本記ニ悪ノ字ヲ サガトヨメリ

ヨモキフ

吾家ヲ早下シテイヘルナリ

ヨルベノ水

ヨルヘノ水ハ神廟ノ前ニアル水ナリ

ヨルベ

男ヨリ女ノ方ニ行キスム故男ノ身ヲヨスル所ト云義ヨルヘトモ ヨスカヒニ云ナラヘリ

タユゲ

クタヒレタルサマ〳〵又月ツキノダルキニモ

タトくシ

タシカナラヌナリ

附 淫氣 色ニ耽リ恥ヲシラス 恥ヲ忘ルヲ云

ヌツキ

メヨリ ナリ

真人 常ナラススグレタルヲ云 藏六 亀藏 名外ハモアリ 安座ノ義

メドル

トマカクト思ヒハカラヌナリ 汐ノナマリ 又ハ

ダミ

凡ダムトハ正シカラヌナリ 又ハ道ノユカミナドヲ云ナリ

ソコラ

人ノ多キナリ 昔年ニ若干ノ字ヲ用ユ

ソユハカリ

ソレト定メサルナリ 同耕 メカヘス 多ヤスハ混リトソ

ソゾロ

スヽロト通フ 坐コヽロナラズト云フナリトソ

ソビエテ

メカキコトナリ 人カラノケタキヲ云

ソボチ

ヌレメルサマナリ

ツブノハ

注ニアキラカニ合点シタルナリ 又セチニ思フ

ナマノハ

時ムヲセキアケテナケル音ノスルヲモ 又人ノ把メルサマヲモ云ナリ

移ラナマトヒ云 汐ハ十分ナラス半ナルヲ云

ナイカシロ
ナリハヒ
ナマメク
ナラシ
ナヨ竹
ラウガシ
ラウタケ
ラテン
ムゲ
ムベ
ムツゴト
ムツシ

物ヲモノトモセヌヲ云　附無禮（ナメゲ）アラマシ如字義
業ナリ
物ノマタナリ定テラテ若キヲ云又色モテコブルヲ云
明日ノコトヲ今日内ミニテ口〻ロミルナリ
ナヨ〻トヤワラカナル竹ヲ折ヌヲホメテ云ヘリ
サワガシキ〻又人ニ對シテ不敬ノサマヲモ云
美シウテヨハ〻トミユル〻労ノ字ヲ書テ第卧テヨハキナリ
青貝細ユナリ
況マチ〻ナリ悼サルキミモアリ
道理テコソナト云ゴトシ
ムツトハシタ〻シムコトナリ
ムツマシキナリ　シヌシムナリ

ウソフク
ムツカリ
ムヽト
ウシロメタ
ウタテ
ウチツケ
ウツシ心
ウヽシ
ウタ〻
薄墨衣
ウキ〻（ウキマキ）
散米
クヅヲシ

人ノ云コト心ニテツスヘキヲナニトモ思ハサル心
忘味空ウソ吹テ人ハユ情ニ吹ノ忘ル月詠
板立テ泣ナリ
クチノウチニテ笑フサマナリ
心モトナキ義ナリ
ヨキニワルキクセノツキタルナリ
ヘテ引チト云討一ムキニ他夏ナキヲ云
現心ヲ云イワハリナラヌ心ヲ云フ
屈ノ字ヲヨカク云カ
物ノカサナリ過ルヲ云
妻ノ服ナリ三月ヲ限リトス
冊ヲ云
幼子ノオビユル時糸ヲマキチラスハマヂナヒナリ
思ニ身ノナヤム心ヲ折ルノ義ヽ

附野等草ノ字ソ野原
壮男両義

クマナソ
マニブトナキ
ヤヲラ
ヤ〻
ヤサシ訓ベシ
ヤウ
マミ
マカハ
マバユキ
マタラゴト

カリし曲リタル弼ノナキヲ云 附件 今ケ條ヲ合ツヲ云トソ
無慮(マムコト)ノ義ナリ △ヤユトナキハ尊キヨシロナリ
注 ヤガテノ心ナリ 又シツカニ 俗ニソロリ
ヤヽハヤウ〳〵ニテヨホトナリ
外ヲノハツカシキコトナリ
ヤウハ同ヤウトヽヲ畧シタル訓
目ヲアケテ物ヲ見ル用ヲキナリ 又マミレルナリ マブレハ誤ナリ
目ノマフタナリ 附 隋意 ニハ万葉ノ訓ナリマカスルノ義ナリ
世ニ盛ナル人ハ日ヲミルカ如シシカトミカメキサ
マヲ云 彩帋其物ヲ形容スル訓ニテ色々ニ用ユ
スヘテ身ヲハナタメヌヲマクラト云常ニ工書タル
物ヲ御ソバニオカルヽヨリイヘルナリ

ケシキバミ
ケジメ
ケブリ
コトグサ
心ニクキ
ユヨナフ
心オクレ
コリズマ
コヨナカラ
ロヽウ
アイナソ
アメウ

ザレバミタルヲ云 懐妊ノケシキミユルヲモ云
分チ目ノ畧ニ 差別トモカゴトシ 澆季(ゲウキ) 末世ヲ云
春ノ木ヽノ茂リテクラキヲ云
ロクセトモカコトシ(フケフカス ヒケラカス誤) 褌(フドシ) フンドシ誤 風聽(フウテウ) フイテウ誤ナリ
内ニ思ヒノオホウカナクツヽマレテミユルヲ云
契ヲコレニスギテコユルコトナキヲ云
心ノサトカラヌヲ云
マハソヘタル羽ナリ
似ツカサラヒノヨヽロナリ
多キヿナリ俗ニユノイカイコトノ中テトイハンカ如シ
無ノ愛ナルヘシ
ヲシムベキナリ

アヒナタノミ　カヒナキタノミト云フナリ

アクガレ　ウカレアリクナリ

アヂレ　タハムレカヽルナリ

アカラサマ　アリノマヽノユヽロナリ

アヤニクシ　アヤニクナル筋来トアルハコヽロナキ筋来ト云ユヽロナリ

アヂキナウ　無味氣ナリ人ノ情ヲ五味ニ喩ヘ心ヨキヲウマシ辛苦ヲカラシト云心ニカナハヌ情ノナキヲアヂキナシトイヘリ

アナガチ　アナハ嘆息ノ詞ナリ　腊ハ美ヒフヨキ心ナリ　シイテトモニ同

アナ　俗ニアヽアラナト多ク系心ニアメリテ事ノセツナルヲ云アラアツヤアラサムヤナドナリ

アタメク　日本記ニ放流ノ字ヲヨメリ　好色ヲイヘリ　アダハイタツラナルヲ云

アナカシコ　アラオソロシツヽシムベシト云辞ナリ

アサハカ　又文ノ末ニモ用テトムルナリ或甚可畏トツヨマセリ　ハカハ助語ナリ万葉ニ浅ノ字ヲ

アマエテ　タハフルヽコヽロナリヌウレシキカタニヨリナルヽキミナリ

アサリ　無名抄ニ朝ニ漁スルヲアサリト云タニスルヲイサリトヨヽ　俗ニアセリサガスナト云キミナリ万葉ニ求食ヲアサルトヨメリ

アダビト　好色ノ人ノウツリキナルヲ云

アテ人　イヤシカラヌウルハシキ人ヲ云

アコ　幼少ノモノヲシタシミテ部兒ト云

アカヅキ　梵語ニ爾伽トアルハ香水ヲ盛器ナリ假テ水ノコトニスヅキハ水ヲ入ルウツハナリ

アシロ
屏風

サヽメキ　竹ヲヘキテツクル屏風ナリ

サヽヤキテ　モノイフサマナリ

サガナシ　万葉ニ怒ノ字ヲヨメリオソロシキ意ニ嫉妬ノ二イヘリ

サスラウ　ヲチフレタルヲ云　則尤遷　又同シ

サヽヤカ　サハ技ナリ

サヤカニ　小サキナリ　サエヤカノ畧ニテ清明ノ義ナリ

サルモノ　サアルヘキコトハサアリテト云義ナリ

サヘヅル　スベテ物ノ艾ヲガタキカシマシキヲ云ナルベシ

サラヌワカレ　死スルコトヲ云

サガ　サガナシトハ別ナリ

サイツ此　サキツゴロナリ　ツハ助語ナリ

北ノ政所　凡三公ノ妻ヲサシテ云別ナルヘシ

ユミシキ　善悪ニ通スル名甚シキニモ心ヱナキニモヲゴソカニモ

ユクリナク　思ヒヨラヌヽ日本紀ニ不意ノ字ヲヨマセリ

タマトヒ　赤マトウナリ

ユルシ色　紅紫ノ深キ色ハ禁色ナリ浅キハユルサレタル色ナリ

メザマシキ　冷眼ナリ見テオトロクハカリヽ

メカス　ソレトヲ明ニ見ユ　上手メカスナド

メモアヤ　見ルニアマリウルハシク却テアヤシキヤウナルヲ云

ミサホニ　ミサホハ常住不断ニト云意

ミシロキ　身ノウゴキユルサマ

ミダケウシ　大和金峯山ニ千日精進シテ參ルコト

ミゴキ　天子ノ御忌日ナリ

ミヤビ　宮フリナリウルハシキヲ云　ミヤビヤカトモ云

ミクルシキ　見ル目ノクルシキナリ

短カキ　戔ヲ云ニミチカキハイヤシナリ

ミマキ　牛馬ヲ飼所ナリ

ミツワクミ　老人ノ身ノカヽマリタルヲ云ナリ

ミメ　御妻天子ノ

シホタレ衣　シメル夏ナル塩ハシメルモノナリ

神宮ノイミ物ニ哭ヲシホタルト云

シトケナキ　衣裳ヲツクロハズキナスタクヒナリ

シツヒナキ　無静心トハウカレサハクサマナリ

シメテ　領シテナリ我物トスルヽ又心ニシメテハ深ク占ノ字ノ

シメリ点　コヽロ系モノニスルナリ

シメヤカ　自ホコルサマナリ物ヲ為得タル点ナリ

徐ノ字ノ戔　シツカナリ

シメヽカ　下臆ノ戔ニテ　イカメシキヲ云

ジハウ　実方ヽ人ガラノカタクヒテ色ナトニマヨハヌヲイヘリ

ジレヽシ　オロカナルナリ

シメノホカ　神社ノ注連縄ヽコレヨリ人ノ何成ヒ系物ニスルヲ云

シレモノ　万葉ニ愚人ヲシレタル人トヨメリ

シボチ　新発意ナリ初テ山家シタルヲ云

シメリ　神代紀ニ哀ノ字ヲシメルトヨマセタリ老附タルナリ

シヂ　車ニノリオリノ時ノアシツキナリ

ヒメフル　俗ニ云イチムキノ意ナリ

ビンナキ　人ヲアハレムモイチラシキヲヽニモ　イタハシキヲヽニモ云

ヒツミ　老サノロツキヲ云

ヒキシロウ　常ヲトカジト引アラソウ

ヒトゴチ　獨言トナリ

ヒメラ　秘藏スルナリ

ヒソミ　アラハレヌナリ

擂垣　ヒハダニテ拔ヘメルカキナリ

ヒフリ　雹ノフナリ　ヘウノコトナリ

ヒミヅ　ヒヤヽカナル水ナリ

ヒトヘ心　何ノ思リヨモナキ心ナリ

ヒゲガチ　鬚ノ多ナリ　多ヲカチトヽヘリ

ヒハツ　ヤセヲトロヘテヨロノヽトシタルナリ

ヒトリ　是ハ香炉ナリ

モノヽアヤメ　物ノワカチナリ

モギ木　枝モナキ木ナリ

モミキ　百石木　正況ナリ　百トハ多キ數ヲ称スルノ言ヽ

玄コヽロハ數ノ石ヲ以テ下ヲカタクシカズノ木ヲ以柱トシテ造レル大宮ト云意ナリ　石ヲシ

トヨムコト　明石ナトノ乳ナリ　昔ハモヽシキ

ノ大宮トツクケタルニ中昔ヨリモヽシキト

ノミイヒテヤカテ禁中ノ御コトニナセルナリ

母屋　母ハ音ニアラズ　オモヤノ上畧ナリ日本記

万葉ナトノ哥ニ才モフヲバモフトノミヨメル

ニ准フベシ　母ヲ古実ニ才モトイヘルハソタツル

恩ヲ重故ナルベシ　オモヤヲ本トシテサマヽクノ屋作

ホソドノヒサシナトノ茅ルハアマタノマニ似タルハサテ

オモヤトハナツケタルベシ

百千鳥　モヽ千多ノサヘヅルモ笘ノ音ニ才トラヌコヽチシ

テトアリ万葉集ニ我カトノヲノミモリハミ百千

多千ドリハツレド君ゾキマサヌ　トヨメルカ　又オノ

ノ〻拔ノ実ヲセリエテ ハムト云ニヤ
百千鳥ハ千多ノ多キナリ百千鳥ニ五百ツ鳥ニ
ヨメルニ同シ百千鳥ト云鳥ノ一名ニアラズ ニ度
タ〻ミテイフ時ハ百ヲステ〻千鳥ハクレド〻云
ニテ知ルヘシ

セキニ　切ノ字ノ音ニテ 切々ノ意ナルヘシ
セメテ　セマリテナリ心ノ字ヲ心ヲセメテトヨムニテシルヘシ
センジス　天子ノオホセヲ女官ノ書故 凡代筆ヲセンジスト
スゲナウ　注ニ日本紀ニ無人望ト書スゲキ意ニテナウハ
スガノ〻　用語ナリ〝無ニハアラズ
スサマシ　サツハリトシテ心ニカ〻ラヌナリ神代紀ニ清ヲ
スガノ〻シトヨミタリ
荒ノ字ヲヨミテ荒涼ノ義ナリ荒涼ハスサム
コトニテ スサマシハ荒涼ナラントスルナリ マシト
ハ欲ノ字ノ義ニ故ニスサマシト イヘハミツギノ

スキバ〻　アシキコナリ スサミカル ケシキナリ
スヽロ　スキトハ色ヲコノム方ニ多クイヘリ
スサビ　俗ニメツメニモ アテドナシミナドト云意ナリ
スサメヌ　本ハ荒ノ義ニテ事ニ怠リスサミテ アラヌコトノ
スグノシ　出来ルナリ人ニハ常ニ通ヘリ
スダク　スヽテヌナリ 不愛ノ義ナリ
スコヤカナル ニ同シ
万葉ニ多集ト書テ スダクトヨメリ 虫ノ
多アツマリテ カマヒスキ意ニイヘリ コドモナドニ
モヌ云リ

スイガイ　柴 竹ノ垣ナリ
スアヅバラ　人ヲイヤシメ云言ナリ
スモリ　鳥ノ卵ノカヘラテ 巣ノウチニソレナカラク
チメルヲ云

右天明四辰年出板浪華黄備園主人識

〈附録枕言葉

ミヤヒタル　ナマメク

羨シハ　ムカシハ　花立華

アハヌハ　迄支ナキハ　イナセヽヌ

オユリ　タヨリハ　ヨスガ

心ナフヌ　モロトモハ　ムベ

水ノアハ、　未タアハヌハ　天ノハシ立

舟唄ハ　思ヘ乱ル、ハ　シノブモジズリ

集ル、ハ　コカル、ハ　スミガマ

タマニハ　ナキ名ノ京　ヌレキヌ

紙アケハ　鶯　ハ　ニホヒ鳥

乙ヲハ　猿　ハ　マシラ

山　ハ　アシビキ　中絶テ　ハ　イハハシ

大喪ハ　モヽシギ　田舎　ハ　イナムシロ

夢　ハ　ヌバダマ　神　ハ　チヲフル

兄弟ハ　ハラカラ　父　ハ　タラチヲ

母　ハ　タラチメ　父母　ハ　カゾイロ

盗人ハ　シラナミ　男　ハ　マスラヲ

民百姓　アナヘツサ　セツカイ　ハ　ウグヒス

夜　ハ　ムハダマ　日ノ出　ハ　アカネサス

天　ハ　久カタ　地　ハ　アラカネ

恨ミハ　クズノ葉ル　朱　ハ　ウチマキ

蕨　ハ　〈クロトリ　麹　ハ　アサカホ

翡翠　ハ　ヲボソ　鯨　ハ　ヲサガリ

永辭ハ　月　夜
夜明ハ　玉梓　笛
タク繩ハ　梅ヲカタグルナハナリ
ラウヌクハ　イトオシキコト
ラウカハシキハ　礼カハシキコト
五明トハ　扇ノコト
涼シキ夜ハト　極樂ヲイフ
タレコメテ　帳ナトヲタレコミルノ義ナリ
芦スダレ　涼閣ニ掛ル玉ヲ

豆腐ノカラ　卯　乃花
清酒ノカス　カリハウ山伏ヲ云
月ノカツラハ　ヒトヲトラレヌコトヲ云
ウラタケハ　クルシキ口
元ヒカヅラハ　ぬるゝのコト
ヒイカツラハ　女ノ作カツラナリ
雀色時ハト　暮方ヲ云
玉ギル雲カクレ　死ルコトナリ

一年ヲ　朝年　卒年　周星　旬年ト云
去年　客年　祖年
今年　是年　今茲　○閏年　門玉　王門　月餘
豊年　有年　樂歳　○凶年　欲年
一ト月　滿月　三旬　三旋
昼夜　旦暮　早晩　晨夕　昏明　晨昏
早朝　昧旦　向曉　五曉　黎明　鷄晨
昼分　亭午　卓午　駄日　通日　終日
夜分　一昔　書夕　通宵　五鼓　鼎夕　後夜
古昔　生昔　往昔　遂古
近頃　頃者　近者　比者　迹者　廼間
吉日　良辰　今日　勝日　元辰

兼日　昨日　間日　連日　累日　積日　暖日
今日　昨日　是日　不日　昨日
昨日　前日　往日　晨日　日前
明日　翌日　来日　清日
人ノ状　芳書　貴札　貴墨　高札　貴札　為替書　貴札　為替書
我状　恵翰　玉章　尺書　短札　寸毫
人ノ文　清削　墨翰
我事　不佞　拙子　熟生　早子　賢拙
人国所　尖府　仙府　尖紙　尖紙　仙郷
我国里　仙邑　錦里　千里　仙郷
白邑　山郷　白列

人ノ居所　仙居　高居　崇宇　慶門　仙庄
我居所　佳宅　玉宇　尖館　清宇　水壮観
我居所　蝸舎　廃巣　白屋　窮庵　蓬戸
草舎　草舎　芽屋　邑亭　荒庭
師　尊師　老大先生　師坊　師父
人ノ父　令父　令父　賢父　老大人
人ノ母　令母　令堂　賢母　賢母
人ノ妻　内相　内室　内室　内主
人ノ子　令子　秀子　桂子　成長ノ人ハ下息ノ字
人ノ娘　息女　水晶玉　息女
亦父母　家父　亦母　亦母　慈母
亦妻　荊婦　細君　内助　内房

我子　兎息　牡罍　兎子
錢ハ　翡翠　青龠　彩月　青銅
酒ハ　既醉　竹醪　茶ハ　金芽　佳茗
竹ハ　竹君　琅玕　柳ハ　忘花　蚕玉
硯ハ　文房　玉池　墨海
墨ハ　室墨　油龍　玄泉
筆ハ　文毛　雲筆　深穎　霜毫　燕二本一竹

老テハ子ニ従フトヽ云諺ハ毋ノ事ニシテ父ノ子ニ専ラ従ノ義ナシ
サノ三従是ナリ

独楽

○柳大道ノ教トヽ云ハ其理ヲクダキテ人ヲキメズ是ナル時モヨロコビズ非ナル時モウラミズト一口ノ柏子ニ説玉ヘハ尼モ入道モ三界ニ通ズソレヲ一音ノ経トハ云ヘリ

天地ノ變相ヨリ今日ノ人間世ニ變ヲ知ル聖人トヽ云ヘ變ヲシラヌ愚人トヽ云知トハ驚不驚ノサカヒニシテ實ヲ認ルト認サルトノイヒナリ

實ハ黄金ノ用ニ似テ是ヲ似テ人ヲトヽナイ是ヲ似テ人ヲソコナフ早竟ハ認ルト認メサルトノイヒ也

聖人ノ實ハ天地ニ通リ小人ノ實ハ一所ニトヽユフル是唯天理トヽ人理トニ一歩ノ好要有故ナリ

人ノ利鈍ヲ以テ一歩ノ金ニ喩フツカヘハ印着ノ
腹ヲクダシツカハ解毒ノ光リニモ及バズト是
ヲ論ゼハツカフヘクシテツカハザラムハ鬼神モソレガ
基所ニツクバヒツカハズシテヨクツカフニハ君王モ
ソレカ子代ヲイノウン曾我曰貪ホトツラキモノハ
ナシトハ金ヲツカフテ見ヌ人ノイヒシテツカフテ
後クルシサヲハシラサラム
我支ヲ我ト云ナカラ何ノ故トモ何ノ為ニ我ヲ知
者ハ世ニスクナシトソ
論語ハ始ニ学而ノ詞アリテ中ニハ詩書礼
樂ノ文ト質トヲ論シ終ニハ今日ノ言語ヲ
知レト云ヘル此三ハ世法ノ實学ト云ヘシ

三思ノ差別ヲ論セハ心ニ一タビ思フトハ目ニモ見
エ耳ニモキコエ觸レシハ皮ニモヲボヘナカラ思ヒカヘ
サヌハ禽獸ノ類ナリサルヲ二タビ思ヒトモ其
理ニ其時ノ変ヲワキマヘス見聞ノマニフルマフ
ヲ学文ノ日傭ト云ヒ三タビ思フテ埒ノアカヌヲ
無縄自縛ノ偏人ト云ナリ
知ト云不知ト云ハ人唯一虚ヲ知時ハ放逸ノ
風人トナリ人若シ一實ヲ知トキハ偏屋ノ庸
人トナル虚實ノ用ヲ知ヲ賢人ト云フ聖賢ハ唯自利々
ノ変ヲ知ヲ聖人ト云フ聖賢ハ唯自利々
他ノサカイナラン然ルニ虚實ノ虚實ト云ハ
俳諧ノ家ノ秘密ニシテ虚實ノ實ヲ知ハ

天下ノ君トナリ虚實ノ虚ヲ知ハ天下ノ
師トナル旱竟ハ名利ノ用ト不用ナリ
虚實ノ大小ヲ論セハ虚ハ大ニシテ實ハ小
サシ譬ハ針ノ實ニシテシツミ舩ノ虚ニシテ浮ヘル
ガゴトシ
釈迦ハ虚ト説テ未来ヲ示シ老壯ハ實ト説
テ現在ヲイマシム
總而物ノ理ハ五ツノハナシハ理屈ニツセリテ怒リ
ナカラ彼カ働ノ五ツナランヨリ道理ニナヒキテ
喜ヒナカラ彼カ働ノ五ツナランハ彼モ而白ノ我
モ而白リソコヲ諷諫ノ和説トハ云ナリ
此ニ飾ルモノハ心ニ飾リ口ニ奢ルモノハ心ニ奢ル

上ノ貫ヲ下ニツクナヒ下ハ一金ノ賂ヲ以テ百
金ノ上ヲカスメントス君トシテ民トイヒソレヲ
老子ハ半短ニ　大道廢テ有仁義トス又
カクシ横目ニ悪ヲサガサスハ民ニ盗ヲ教ル也
うムコノ故ニ孔子ノ五刑ノ解ニモ
縄之ヲ以刑ヲ是ヲ謂為民設穽而陷之
トソ
爲人ノ不謀乎　交友ニ不信乎　傳ヘテ不習乎
孔子モ行ヒヲ教カ子テ
奢則不孫ナリ倹則固　與其不孫也寧固
同未来記ニ曰
興於詩　立於禮　成於樂　民ヲハ可使由之

不可使知之ヲ中畧行之ヲ由之トハ修己以敬トシ

修行地ト云事

十歳ノ性時ハ其コトヲ見ツクシ十年還トキハ其理ヲ知リツクス理ト支トハ道ノ車馬ニシテ此二ツヲ得ル時ハ廿年ノ功ヲツミタル能諧ノ上手トハ云ヘキナリ又能諧ノ知ト不知ト論セハ二十年ノ下手ハ論ニモ及ハス二十年ノ上手ト百日ノ下手トハ其場ハ同林下ニアソヒテ中畧コヽニ上手ノ下手ニ似テ下手ノ上手ニ似サルコトヲ知ヘシ中畧カリハ侃侃ノ俗談平話ニテ往クモカヘルモ同シ道理ナルニ戻リテ故里ノ能諧ニアソバザルヲヤ

富士高シトイヘトモ平地ニシカズ

学知ノ者ハ唯庭前ノ築山ノゴトシ

衰樂須臾

論語ニ関雎ハ樂而不淫哀而不傷

陽化貝篇ニ

女子ト與小人トハ爲難養也近之則不孫遠之則怨トイヘル

或妾ノ不孫ヲ評シテ

始ニハ擂盤珠ノコトク中頃ハ箕盤珠ノコトク終ニハ佛頂珠ノコトシ善ヲスヽムレハ近クヨリ悪ヲコラセハ遠クウラム

和訓ヲ秘音シハ男ハ唯ト答ヘ女ハ俞ト答フアイニ
居ノ字ヲ加フアイハ辭ノ文ナルヤ諾ノ字ヲ註テ
以言許人ト云ハ否乎諾乎ノ返答ニテ
唯トハ無心ニシテ口ニ答ヘ諾トハ有心ニシテ意ニ
答フ古訓ニハ應ヒアリ　父君ハ無諾唯ヲ起
ト云ヘルトキハ返答モ唯居ハ尊ミ諾歷ハ尋ム
唯諾ニ有心無心トハ人ノ返支ニ口ヲ用ヒハ自然ト
阿ノ声ノ出ル故ニ心ニ叶ハスモ唯ヲト答ヘ否應ハ物
ノ約諾ナシハ心ニ叶ヘハ諾ヲト答フルナリコノ故ニ曲
礼ニモ何々ト名ヲ召スニ父ニ對スル尊答ナシハ物
ノ実否ヲ糺スニオヨハス唯トロニテ答ルナリ
嗟ノ訓　音ノ急ナルハ總テ偏音ナリン共シハヤ物ノ
綏和ナレハ嗟ニ悲ニモ云ヘト支ノ急ナシハ嗟ト
ノミ云テ言ノ分レスヲ喑ニ註シ歎ノ發聲
トモ云ナリ　奭　嗟　言奭ト
吐トハ制シテ物ヲ停ル意ナリ
嘶トハ蹂イテ生ル〻行答ナリ
吸吹哢　訇　哢　哢　嘒　嘒　哢　哢　詢　誣　遣
寒ケレハ吸ト息ヲ呑ミ　暑ケレハ吹ト息ヲ吐ク
但塵ナトヲ吹トキハ哢ノ字ヲ用ヘケン
訇ノ字ハ駭キ言声ナリト急ニハ訇ト云ヘ緩ニハ訇
トヲ　與訇乃駭則ニ總テ上ニ用ム與ノ字ナリ
哢ノ字ハ吁鷄ヲ皇子言ノ声ナリトアレハ宴ニ
ハ烏々ノ畧語ニテ　唐ニハ〻キナト云ヘルニヤ

或ハ嘑ト息ヲツヽキ或ハ咿ト肝ヲ消シ或ハ噢
ト絶入ルナト　但咿ノ字ハ咿トモ訓ズ
或ハ訶々ハ衆声ナリト漢ニモ言ヲ重ヌレハコヽ
ニハ訶々ニモ訶々ニモ訓セン　嚙ノ字ハ齧骨ヲ
声ニテ緩ケレハ嚙々ト訓シ緊ケレハ嚙々ト
訓シテ此等ニ文ノ語勢ヲモ知ヘシ　誣ノ字ハ
アハヽト訓スヘキヤ漢ニモ阿阿々トハ笑フ声
ナリトソ　時ノ字ハ趙ヲ声ニテヨヽニハ時
ト訓スヘキ　吁ノ字ハ疑怪トアレハ吁ト向返
スサマナラン　逭ノ字ハ會意ニテ逕ニ吁ン人ヲ
声ナレハ尤モ逭ト訓スルニヲホトハ音ノ御音
ニテ仁ハ例ノ咏韻ナルヤ

元来文字ハ人ノ語意ヲ以テ設ケタルモノニテ
文字ニ據テモノ言フニ非ス世人多ハ地言ハ其
字ニ據ド云ハ大ナル謬ナリトヽ
又　字ヲ重レハ言トナリ言ヲ重ヌレハ句トナリ
句ヲ重ヌレハ章トナリ章ヲ重ヌレハ一部ト
ナリテ經ニ書ニ云ヘル如シ
詞ハ言ノ助ナリ辭ハ訟理ナリ辯ハ不受也ト
三字ハ別ニ三用ナレトモ循用スル歟ニ久シ

感仰ハ文章ノ余情ノ哀裕ナリ喻ハ艶書ノ千
東ナルモ思フトノミ云字ノ外ナシトテ思々ト百牧カ
キヤルニ人ノ心ノ露ウゴクヤシキヲ浅芽カ宿ノ忘

シノビ雲井ノヨソニ思ヘヤリテトハ人ヲ勧カス詞ノ
アヤナリ浅芽モ雲井モ何ノ用ナルヤコヽニハ無用ノ
用トヽコトヲ知ヘシ
曰 諷諫ト諂諛トノ差別有差別トハロニソム
カヌヲ諷諫トヽ云ヒ行言ハ弥ノイヒナリ意ニシタ
カフヲ諂諛トヽ云是則 巧言令色ノイヒナリ
コトハヲメクミニシテロヲムサフル
道ハ其師ノ信ニ起シハ法ハ其弟子ノ文ニ弘ルトナリ

御儒佛ノ教トヽ云ハ内秘外現ノ二相アリテノ狀
迦モ孔子モ虚實ハ知ナカラ夫ハ虚ニシテ是
ハ實ナリト一道ノ意地ヲ説玉ヘハ聞人ハ言語
ノ粕ニ酔テソレカコレカト思ヒマドウ日夜ニ
迷ヒノヽテ後ハ虚テモ實テモナカリシモノ
ヲト悟ルハ我トサトルコトナリ本ヨリ儒佛ノ万
巻ハ人ヲサトラスルタメナラス中畧
ソコヲ藥ノ眩眩トハヽヘリサレト狀迦孔子ノ
智德ナラ子ハ聞人モ其虚ニ信心ヲヽコサズ
千疑一沢ノトキナカラン思ニ教化ノ秘旨トヽ
ハ全ク聞人ノ方ニ有テ教ル人ハ變通無方
ナラン然レハ聞人ノ大旨トヽ云ハ迷フテサトルヲ

大悟トシ大悟テ迷ハヌヲ放下トシルヘシ知テ小
道ニ家ヲカマフルヲ佛地ニハ内秘外現トシ
佛名ヲ称シ別世界ヲ領フハ下愚ノ人ニ示スノ方
便ニシテ勸善懲悪ノ教實ニ治國平天下ノ
奇法トナスヘシ智ニシテ愚ヲソシルハ明智ニア
ラスハ以テ聖智ナルヘシ下ハ以テ
下愚ナルヘシ下ヲシテ必智ナラシムヘカラス上智
ハ能ク明ナルトモ得難ク中智ハ疑ヒ且アナトル下
愚ハクラクシテ能ク信ス
煩悩昂菩提生死昂涅槃ヲ見破シ四大本
ニ皈シ性空ニ帰テ苦樂所ニヌカル、是ヲ以テ
大悟トシ第一智トス

佛ノ經ニモ五道ノ姿ヲ地獄ト名ツケテ鉄ノ門ニ
鎗ヲ難カラシナヘ十善ノ姿ヲ極樂ト名ツケテ
玉ノ臺ニ丝生ヲ巢ヲカサル
人ノ氣ノツマルハ地獄ナリ人ノ面白カルハ極樂ナ
リナニカハ今日ノ壇界ヲハナレンヤ

五灯ノ會元ニ達ニノ曰
吾ニ有ル攜伽經四卷示以付ス汝ニ中畧誠ニ知我ノ
二字ヲ解セハ唯仏与佛ノ權實ニシテ談笑モ
風諭モ此一語ニ知ヘキナリ

南宋ノ孝宗帝曰
以テ佛ヲ修心 以老ヲ養生ヲ 以儒ヲ治世ヲ

真言ノ迂詐トヽ云ハ法花ノ開権顕実ナリ釈迦
ノ詞ニハ今マテノ方便ヲヤメテ此タヒハ真言ヲ
シメスゾト八万ノ聴衆ヲヽトロカシ玉ヘト万法ハ本
ヨリ迂詐ナル故ニ涅槃経ニ至テハ一字不説ト
チウシ玉フ
昔大梅ノ常禅師帰心帰仏ノ言下ニ悟リテ
非心非仏ノ鉛語ニマトハス這老漢
惑礼人ヲ味ヽ有ミヽ曰トテ我師ノ馬祖ヲ老耄
セリトハ帰心ニモアラス非心ニモアラス虚テモ
実テモナカリシモノヲト馬祖ノ内證ヲ窺破
セシ故ナリ師迂モサスカノ明眼ナレハ梅子熟
セリト笑言玉ヘリ

禅語ニ一大吹ヘ虚ヲ千大傳ヘ実ヲ

念佛ノ解　　法然上人

世ニ一念十念ニテ往生ストイヘハトテ念佛ヲ
等閑ニ申ハ信カ行ヲサマタメリルナリ念々ニ捨サ
ルモノトイヘハトテ一念十念ヲ不定ト思フハ行
カ信ノサマタメリルナリ信ヲハ一念ニ生トヽリテ行
ヲハ一カタハケムヘシ一念ヲ不定ト思フハ念々
ノ念佛ユトニ不信ノ念佛ニナルナリ其故ハ阿
弥陀佛ハ一念ニ一度ノ往生ヲアテオキ玉ヘハ
念々ニ往生ノ業トナルナリ
此段ハ次定ノニ字ヲ解セントテ信行一致ノ念佛
ヲ示シ玉ヘルカ誠ニ一念ニ一度ノ往生トハ浄土宗

門ノ專要ニシテ十念一念ノ真説ナルヘシ

淨土和讃ニ

彌陀ノ名号唱ヘツヽ　信心マコトニ得ル人ハ
憶念ノ心常ニシテ　佛恩報スル思アリ

同

誓願不思議ヲ擬テ　御名ヲ称スル往生ハ
宮殿ノウナ二五百歳　ムナシク過トソ説給フ

此賛ハ建長六年三聖人八十二歳ノ御作ナル
カ和賛三帖ノ中ノ要文ニシテ一部ノ大意ヲ
知ラシメ玉ヘリトソ但憶念ノ信トヽヘルハ佛ノ
他力ヲ忘レサルトナリ誠ニ文章博達ノ家ヲ
出テ愚禿ノ二字ニ一宗ヲ建立シ給ヘル本ヨ

リ安心ノ法門ニシテ王侯貴人モ目已ノ智能
ヲ恃ヘリ張三李四モ他力ノ恩徳ヲ忘レニヤ佛
法ハ愈テ不思議ノ三字ヲ擬ハス深ク信シ
高ク称セヨトナリ

御文　蓮如上人

抑當年ノ衰ヘコノコロハナニトヤラニコトノ外睡眠
ニオカサレテ子フタヽ候ハ如何ニト案シ候得
ハ不審モナク往生ノ一死期モ近ツクカト覺候

下畧

文明五年卯月廿五日

御文ハ昔シ平假名ナルヲ其後ニハ片假名ニモ
成セリトソ云シハ百余帖ノ御文ニハ全ク他力

ノ本願ヨリ信ノ一字ヲ説尽シ玉ヘルカ殊
ニ爰ノ西帖ナト何ノ子細モナリ安心ノ二
字ヲ採リ逐シ玉フハ般若六百巻ノ叮嚀
ニモ勝リテ無智ノ輩ハ家ニヲ解スヘ
シ本ヨリ上人ノ善知識ナル文ニシテ且雅
ナリトヱシ然モ知識ノ最期ノ詞ニ名残
モ惜シクアシキナシトハ家ヲ文章ノ感仰
ニシテ人天モ此期ニ袖ヲヌラシ草本モ此
詞ニ凋レツヘシ去ヲ頼政ノ哥ヲ評シテ自
ノナル果ハアハレ成ケリトハ武士ノ本意ノア
ツハレト見タル人ナトハ禅門ニハ伎倆ト云イ
我家ニハ痩我ト笑フ風雅ノ哀レヲ知ラ

サルニハ如何誠ニ此文ノ右難キ所ハ此等ノ
詞ヲ文鑑トハ見ルヘシ
佛経ニモ九十刹那トテ一念ノ間ノ往来
アリ人ノ心ノ物ニ對スル時ハ初念ハ先ヘ行キ
退ルモノナリ行ケトモ先ノクラキ時ニ峠ヨ
リカヘルヲ聖人ト云峠ニタヽヨフヲ退人ト云
ソコヲ去我ニトテ浮沓ハ幾限ヲソクシ
ナリ

三界六道 一切衆生
サンガイロクダウ サイシヨウシユジヤウ

諸悪莫作 衆善奉行
シヨアクマクサ シユゼンブギヤウ
クレモヨカレ ヒトモヨカレ

ノ本願ヨリ信ノ一字ヲ説尽シ玉ヘルカ殊
ニ爰ノ西帖ナト何ノ子細モナリ安心ノ二
字ヲ採リ逐シ玉フハ般若六百巻ノ叮嚀
ニモ勝リテ無智ノ輩ハ家ニヲ解スヘ
シ本ヨリ上人ノ善知識ナル文ニシテ且雅
ナリトヱ然モ知識ノ最朝ノ詞ニ名残
モ惜シクアシキナシトハ家ヲ文章ノ感仰
ニシテ人天モ此朝ニ袖ヲヌラシ草本モ此
詞ニ凋レツヘシ去ヲ頼政ノ哥ヲ評シテ自
ノナル景ハアハレ成ケリトハ武士ノ本意ノア
ツハレト見タル人ナトハ禅門ニハ伎倆トヱイ
我家ニハ痩我ト笑フ風雅ノ哀レヲ知ラ

サルニハ如何誠ニ此文ノ右難キ所ハ此等ノ
詞ヲ文鑑トハ見ルヘシ
佛経ニモ九十刹那トテ一念ノ間ノ往来
アリ人ノ心ノ物ニ對スル時ハ初念ハ先ヘ行キ
退ルモノナリ行ケトモ先ノクラキ時ニ峠ヨ
リカヘルヲ聖人トヱ峠ニタヽヨフヲ退人トヱイ
ソユヲ步越シトテ學者ハ桟根ヲツクシ
金銀ヲツイヤセトモ鳥居ヲ越ストハ狐
ノ所作ニシテ道ノ修行ハ流ヘ戻ルナリ

神儒佛ノ三道ハ此八字ニ収ル
諸悪莫作（シヨアクマクサ）衆善奉行（シユゼンブギヤウ）
（クレモヨカレ　ヒトモヨカレ）

神儒佛ノ三教ノ根元ハ神道ハ木ノゴトク
儒道ハ枝葉ノ如ク佛道ハ花實ノゴトク
譬ハ一本ノ木ニシテ別ノ物ニアラサルヨシ
儒道ニモ禮ハ飲食ニハシマルト有テ世界ノ
人ノ禮義ノ元ナリ禮ハカナラス天下ニ本
ツク仁ハ義ノ本ナリ義ハ禮ノ實ナリ
仍テ以テコノ八字ヲ縮メテ神道ニハ正直ノ
二字トナリ儒道ニハ仁義ノ二字ニナリ
佛道ニハ因果ノ二字トナル
同其三法モ孝ノ一字ニ止リテ昂廣ノ説
八八万四千ノ經卷陀羅尼トナル
又儒道ノ禮義三百威儀三千ノ孔子ノ

教モナリ我日ノ本ノ霊宗ト宗源ト齊元ノ
三部ノ神道ノ源トナリ又チムシハ忠ノ孝ノ
一字ニ収ルコトニテ昂チ正ハ我ヨカシ直ハ人
ヨカシ仁ハ人ヨカシ義ハ我ヨカシ因ハ人ヨカ
シ果ハ我ヨカシ也既ニ法花經ノ一乗法トモ
近ク心得ナバ我等ヲ衆生皆苦成佛道ニ
止リ和訓ニナセバ昂人モヨカシ我モヨカシノ
最上ニテ浄土一乗法ノ願苦諸衆生往生
安樂國モ和文ノ所詮ニ直セハ人モヨカシ
我モヨカシノ至極ノ夏ニテ有也
此唯有一乗法ノ夏ハ增上寺開山西誉上人
ノ金明集ノ釈文ナリ

神トハ感仰應變ノ名ニシテ天文地理ノ
妙用ナリ明暮ニ々々敬シテ恐レヨ馴テヲ
ユナハムトセハ其人ヲトカムヘシ秘シテイハヌ
ルヲ天下ノ鎖石ト知ルヘシ

附録

是ヲ是トスルハ諂ヘルニ近シ
非ヲ非トスルハ謗ルニ等シ

○

善ハ常ナリ悪ハ変ナリ悪出テ後善アラハル
善悪ニ迷ハヌ人ハ其善悪ニナウマヌ人ナリ

○

凡十年ノ咲ヒハ三年ノ恨ミト化シ其恨ミハ百トセノ怨ミ
ヲ生ズ

兼好ツレ〳〵ニ曰

・手ノワロキ人ノハヽカラス文カキチラスハヨシ見クル
シトテ人ニカヽスルハウルサシ

・金ハ山ニステ玉ハ渕ニナクベシ利ニマトフハスクレテ
ヲロカナル人也ウツモレノ名ヲナカキ世ニ残サ
ンヨソアラマホシカルヘシ

ツラ〳〵オモヘハホマレヲ受スルハ人ノキヽヲヨロコフ
也ホムル人ソシル人トモニ世ニトヽマラスツタヘキカン
人又ヲスミヤカニサルヘシホマレハスクレリノナリ
タヽシシ井テ智ヲモトメ賢ヲ子カフ人ノタメ
ニイハヽ十ヲ出テハイツハリアリ戈能ハホンナウノ増
長セル也

有人法然上人ニ念佛ノ時子フリニヲカサレテ
行ヲオコタリ彼ル夏イカヽシテ此サハリヲヤメ
彼ラムト申ケレハ目ノ覺タルホト念佛シ給
ヘト答ラレタリケルイトタウトカリケリ又往
生一定トオモヘハ一定不定トオモヘハ不定也
又ウタカヒナカラモ念佛スレハ往生ストモイハ
レケリ是モ又タウトシ
イヤシケナル者居タルアタリニ祖慶ノオホキ硯ニ
筆ノオホキ持佛堂ニ佛ノオホキ前栽ニ石草
木ノオホキ家ノウチニ子孫ノオホキ人ニアヒテ
羽ノオホキ願文ニ作善ノオホク書ノセタルオホ
クテミクルシカラヌハ文車ノ文苾塚ノチリ

屏風障子ナトノ上モ文字モカメクリナヽル筆ヤウシテカキメルカミニクキヨリモ宿ノ主ノツメナクオホユルナリ大カタメモテル間度ニテモ心ヲトリセラルヽコトハ有ヌヘシサノミ能モノヲ持ヘシトニモアラス損セサランタメニトテシナヽクミニクキサマニシナシ珍カラントテ用ナキ支トモシソヘワツラハシク好ミナセルヲイフ也古メカシキヤウニテイタクコトヽクシカラスツイヘモナクテ物カラノヨキカヨキ也

其物ニツキテ其物ヲツイヤシソコナフ物数ヲシラスアリ死ニ風有 家ニ鼠有國ニ賊アリ小人ニ賊有 君子ニ仁義アリ 僧ニ法有

何支モ入タヽヌサマシタルソヨキヨキ人ハシリ給ヒ

コトヽテサノミシリカホニヤハイフ 片田舎ヨリサシ出タル人コソヨロツノ道ニ心得タルヨシノサシイラヘハスレサレハ世ニハツカシキカタメモアレトミツカラモイミシト思ヘルケシキ 片タナ也 能ワキマヘタルミチニハ忍ノチオモクトハヌカキリハイハヌコソイミシケレ

一シヤセヲシセスヤアラマシト思フ支ハオホヤウハセヌハヨキナリ

一佛道ヲ子カフトイフハ別ノコトナシイトマアルオニナリテ世ノ支ヲ心ニカケヌヲ第一ノ道トス此外モアリシ支トモ覽ス

一寺院ノ号サラヌ萬ノ物ニモ名ヲツクル支ムカシノ人ハ少モ永スヒ有ノマヽニヤスク附ル也此項ハ

フカク案シ支学ヲアラハサントシタルヤウニ聞ユル
イトムツカシ人ノ名モメナレヌ文字ヲツカントスル
益ナキ支也何支モメツラシキヲ求ス異説ヲユ
ノムハ浅支ノ人ノ必アル支ナリトソ
友トスルニワロキ者七アリ一ニハ高クマシユトナキ人ニ
ニハワカキ人三ニハ病ナリ此ツヨキ人四ニハ洩ヲユ
ノム人五ニハ武クイサメル人六ニハ多言スル人七ニハ
欲フカキ人　能友三アリ一ニハ物クレ、友ニニハク
ズシ三ニハ智恵アル友
ヤムコトヲエスシテイトナム前第一ニ食物第二ニ
キルモノ第三ニ居住也人間ノ大事此三ニハ過ヘ
カラス飢ス寒シカラス風雨ニオカサレスシテ乐カニ

スクスヲ樂トス但人皆病ニオカサレヌレハ其愁是
カタシ醫療ヲワスルヘカラス藥ヲクハヘテノ四ノコト
求エサルヲマツシトス此四カケサルヲトメリトス此四ノ
外ヲ求イトナムヲオコリトス四ノ支倹約ナラハ誰
ノ人カタヲストセン
世ノ人アヒアフ時皆モ默止スルコトナシ必言葉有
其言ヲ聞ニオホクハ無益ノ談也世間ノ浮説人ノ
是悲自他ノタメニ失オホク得スクナシ是ヲ語時
タカヒノ心ニ無益ノ支也トイフコトヲシラス
我智ヲトリ出テ人ニアラソフハ前アルモノ、ツノヲカク
フケ牙アルモノ、牙ヲカミイタスタクヒナリ人トシテ
善ニホコラス物トアラソハサルヲ徳トス他ニマサル

夏ノアルハ大ナル失ナリ品ノ高サニテモ戈藝ノスリレ
タルニテモ先祖ノホマレニテモ人ニマサレリト思ヘル人
ハ往言言葉ニ出テコソイハ子トモ内心ニソコハリノト
カアリ慎テ是ヲ忘ルヘシ
サシタルユトナリテ人ノガリユリハヨカラヌ夏也用有
テ行タリトモ其コトハテナハトリ帰ルヘシ久シク居
タルイトムツカシ人トムカヒタレハコトハオホク此モ
クタヒレ心モ静ナラス萬コトサハリテ時ヲウツスタ
カヒノタメ益ナシイトハシケニイハンモワロシ其コトナ
キニ人ノ来リテノトカニモノカタリシテ帰ヌルイト
ヨシ
オホカタノ振舞 心ツカヒモヲロカニシテツヽシメル
ハ

得ノ本也タクミニシテホシキマヽナルハ失ノ本ナリ

萬夏 泥(タノム)ヘカラス愚ナル者ハ深ク物ヲ頼ユヘニ恨イカ
ル夏有 勢ヒ有トテ軟ヘカラスユハキ物先ホロフ
戟多シトテ軟ヘカラス時ノ間ニ失ヤスシ 戈有トテ
頼ヘカラス孔子モ時ニアハス 徳有トテ軟ヘカラス歟(カ)
回(クハイ)モ不幸ナリキ 君ノ寵ヲモ軟ヘカラス誅ヲ更
ル夏スミヤカ也 奴シタカヘリトテ軟ヘカラスソムキハシ
ル夏有 人ノ志ヲモ軟ヘカラス信有夏スリナシ
死ヲモ人ヲモ頼マサレハ是ナル時ハ恍ヒ非ナル時モ
ウラミス左右廣ハケレハサハラス前後遠ケレハフ
サカラス セハキ時ハヒシケクタリ心ヲ用ル夏スユシキ

ニシテキヒシキ時ハ物ニサカヒアラソヒテヤフル ユルクシ
テ和成時ハ一毛損セス人ハ天地ノ灵ナリ天地ハカキル
所ナシ人ノ性ナシソコトナラン寛大ニシテキハマラサル
時ハ喜怒是ニサハラスシテ物ノメメニワツラハス
人ノ世ニアル自他ニツケテ所願無量也欲ニ任テ志ヲ
トケント思ハ、百万ノ銭有トイフトモシハラクモ住ス
ヘカラス所願ハ止時ナシ財ハ尽ル期有限リ有財
ヲ持テ限リナキ願ニ任テ妄得ヘカラス所願心ニ
キサスコトアラハ我ヲホロボスヘキ悪念キタレリトカ
タツ慎恐テ小要ヲモナスヘカラス 次ニ銭ヲ奴ノ
コトクシテ遺ヒ用物トシテハ永ク貧苦ヲマヌカル
ヘカラス 君ノコトク神ノコトク恐シ尊テ徒ニ用エル

妄ナカレ 次ニ恐ニ望トヱニイカリ恨ルコトナカレ 次ニ正
直ニシテ絢ヲカタクスヘシ此義ヲマホリテ利ヲモトメ
シ人ハ富ノ来ル妄火ノカハケルニツキ水ノクタレルニ任テ
カユトツナルヘシ銭ツモリテ尽サル時ハ宴飲(アンイン)穀色ヲ
ユト、セス居所ヲカサラス所願ヲナサントモ心トコシ
ナヘニヤスツタノシト申キ 下畧
竹谷業願房東二条院一条ラレメリケルニ乞者ノ追
善ニハ何妄カ勝利オホキト尋サセ玉ヘケレハ光明真
言 笠塔婆(テウバ)卒都婆(ソトバ) 陀羅尼ト申サレメリケルヲ弟子トモイ
カニカクハ申玉ヘケルソ念佛ニマサルコトサムラフマシトハ
ナト申給ハヌソト申ケレハ我宗ナレハサユソ申サニホ
シカリソレトモマサシソ称名ヲ追福ニ修シテ巨益アル

ヘシトカケル経文ヲ見及ハヲハ何ニ見エメルソト童子テトハセ玉ハヽイカヽ申サント思ヒテ本経ノ惜ナルニツキテ　北真言陀羅尼ヲハ申ツルセトソ申サレケル

トコシナヘニ違順ニツカハルヽ支ハヒトヘニ苦楽ノタメナリ　楽トイフハ好ミ愛スル支也コレヲ求ルユヘ止時ナシ

樂欲スル前ニハ名也名ニハ種有行跡ト支蕊言トノ示セル也ニハ色欲ニハ味ナリ万ノ願ヒ此三ニハシカス

是顛倒ノ相ヨリオコリテソコハクノワツラヒアリモトメサランニハシカシ

兼好三失　次ニ十失ノ年アリ

其角ハ洛達ノ人ニシテ人ノ非ヲ昂席ニ及ヒ是質ナルヲ翁義毒ニ思シ其角對シテ

〃　人ノ短所ヲ言フ事ハ己ノ長ヲ説ク事ハ次ニ

ヨノツネを居ルこと　妹ノ風

堅右ノ銘

角世白ヲ感シテ他ノ非ヲ政ル事ヲ止ケルトナリ　角又常ニ大酒スル蕉翁是ヲ製シ玉ヒシヨリ角其後酒ヲ止ルトナリ其後翁大和行脚シ玉ヘ芳野山ニ至曙ノ櫻ヲ詠メ其席ニ去年角カ「ハ」ヲ梅ちらしめぬ

山うゝ〜しらゝ〜白サノミ秀逸ヒ思ハサリシニ今爰ニ桃望シテ佳境ニ入タルヲ感シ是全ク角カ酒ヲ好メル徳ナルヘシト禁斟セシ酒ヲユルシ以後モトノコトク酒ヲ飲玉ヘト芳野ヨリ武江ヘ状ヲ贈ラレシトナリ　師弟トモニ保切ナルユヘ酒徳頌ヲ綴シ

ヘシトカケル経文ヲ見及ハヲハ何ニ見エメルソト童
子テトハセ玉ハヽイカヽ申サント思ヒテ本経ノ惜ナル
ニツキテ　北真言陀羅尼ヲハ申ツルセトソ申サレケ
ル
トコシナヘニ違順ニツカハル、支ハヒトヘニ苦樂ノメメ
ナリ樂トイフハ好ミ愛スル支也コレヲ求ルユヘ止時ナシ
樂欲スル則一ニハ名也名ニ二種有行跡ト支義トノ
ホマレ也二ニハ色欲三ニハ味ナリ万ノ願ヒ此三ニハシカス
是顛倒ノ相ヨリオコリテソコハリノワツラヒアリモ
トメサランニハシカシ

其角ハ活達ノ人ニシテ人ノ非ヲ昂席ニ改ル事質ナルヲ翁義毒ニ思シ其角對シテ
人ノ短所ヲ責ル事ハ
己ノ長ヲ説ク
ものゝ
堅右ノ銘

角世白ヲ感シテ他ノ非ヲ改ル事ヲ止ケルトナリ　角又常ニ大酒ス
蕉翁是ヲ制シ玉ヒシヨリ角其後酒ヲ止ルトナリ其後翁大和行脚
シ玉ヘ芳野山ニ至曙ノ櫻ヲ泳メ其席ニ去年角カ「明日ハ櫻ヲ」めぬ
山うゝ〜と〜〜白サノミ秀逸ヒ思ハサリシニ今爰ニ眺望シテ
佳境ニ入タルヲ感シ是全ク角カ酒ヲ好メル徳ナルヘシト禁断セし
シ酒ヲユルシ以後モトノコトク酒ヲ飲玉ヘト芳野ヨリ武江ヘ状ヲ
贈ラレシトナリ師弟トモニ保切ナルユヘト酒徳頌ヲ綴メシ

書札

大小ノ聯

聯ハ初メ門ノ榜ニシテ必左右ノ柱ニ掛シヲ趙宋ノ頃物好ヨリ横ニ方ナルヲ額ト云竪ニ長キヲ聯ト云テ佛閣神舘ノ莊嚴トナシ野店山莊風流トナセリ其品ハ經書ノ一對欲詩文ノ一聯カヲ板ニ彫リテ左右ノ柱ニ掛ル故ニ畧シテ聯トハ云ナレハシサレド今ノ世ニハ二牧ニカキラス一牧ノ板ニ聯ノ詞アラシモ一句一章ニシテ五字七字アトナシ家シテ

大小ノ句

一二 正二 志 四 ろ 六 土 九 笑 九 咲

若菜摘ミ 正 宛 三 本 飛 五 于 昌 アヤメ

八十 八十 翠ノ 老 モ 示 十二 待ツ 春ヲ

摩訶

阿佉 アキヤ

遊宴遊興ハノ失

一行ニ怠ル 二財寶ヲ徒ニ捨ツ 三喧嘩ノ端也 四ツ貪ヲ招ク 五勢虚ト成ル 六盗賊ノ端ナリ 七俊リ生ス 八学文ノ障トナル 九一切ノ行業ヲ障ル 十道ヲ失フ 十一心身ツカル 十二病生ス 十三禮法ヲ乱ル 十四美食ヲ好ム 十五分過ノ世財ヲ多カウ 十六下人ノ辛苦ヲシラズ 十七訢ノ道不行 十八大酒ト邪欲トヲ生ス 十九上下ニ遠シ 廿智人是ヲ笑フ 廿一一命ヲツヽムルノ端タリ 廿二無量ノ悪事生ス 廿三諸具ヲ調フ

大酒二十失有事

無用ニシテ間ヲ取 二色赤ク眼念ヲ嚴顔不正 三病悩ヲ生ス 四行ニ怠ル 五心狂亂ス 六是変悪事ニ逐フ 七心身悩亂ス 八密事ヲ顕ス 九虚言ヲ吐ク 十行ニ誤アリ 以上

大小ノ聯

聯ハ初メ門ノ榜ニシテ必左右ノ柱ニ掛シヲ趙宋ノ頃ノ物好ヨリ横ニ方ナルヲ額ト云竪ニ長キヲ聯ト云テ佛閣神舘ノ莊嚴トナシ野店山莊風流トナセリ其品ハ經書ノ一對欲詩文ノ一聯カヲ板ニ彫リテ左右ノ柱ニ掛ル故ニ畧シテ聯トハ云ハルヘシサレド今ノ世ニハ二牧ニカキヲス一牧ノ板ニ聯ノ詞アラシモ一句一章ニシテ五字七字アラムモスヘテ聯トハ云リケリ然ルニ月次ノ大小ヲ板ノ表ト書トニ銘シテ夫ヲ大小ノ額ト云家々ノ當面ニ掛置コト何レノ時ノ支覺ニアシラ

又 麻辛訶 阿佉 梵語ノ聯 二牧

○遊宴遊興ノ失人

一行ニ怠ル 二財寶ヲ徒ニ捨ツ 三喧嘩ノ端也 四ツ貪ヲ招ク 五勢虚ト成ル 六盗賊ノ端ナリ 七俊リ生ス 八学文ノ障トナル 九一切ノ行業ヲ障ク 十道ヲ失フ 十一心身ツカル 十二病生ス 十三禮法ヲ忘ル 十四美食ヲ好ム 十五分過ノ世財ヲ子カウ 十六下人ノ辛苦ヲシラズ 十七訴ノ道不行 十八大酒ト邪欲トヲ生ス 十九上下ニ遠シ 廿智人是ヲ笑フ 廿一一命ヲツクムルノ端タリ 廿二無量ノ悪事生ス 廿三諸具ヲ調フ

大酒ニ十失有事

一無用ニシテ間ヲ取 二色赤ク眼念ヲ嚴顔不正 三病惱ヲ生ス 四行ニ怠ル 五心狂亂ス 六是更非事ニ迷フ 七心身惱亂スハ密事ヲ顕ス 九虚言ヲ吐ク 十行ニ誤アリ 以上

篁々ハ戈ノ時
ハシメヨリマコトナレハカノモツトモスムヿ。ツトムルトキスリナケレハコウステニムナシ
一一学一一。勉一一功一一
ヒトリヲツヽシメハミナマコトニナリウカナラヒヒニナカケレハナメクミヲテ入
一一道一一。習一一智一一
フクシテムチニズンハリス
服一一不一忘徳トツマツオイツカラヒカルソノカスキハマリナケレハ
一一一。其一無一
オホイニシテコヽロヒロシ　ヒトシテリケンカウヲ　マツヘシ
一一一老一一私一一言一行一一天一
カヘワメクミニ
一字十六
一字十八

巻頭巻軸句ノ順坐ノ年

輯文曰人不通古今馬牛而如襟裾タトヘハ百人一首ヲナラフルニモソノ見様有巻頭ハ食ナリユヘニハ天智帝ハ格別ノ訳アルヨシナリ巻軸ハ廢帝ナカラ住ノ御制巻ニハ女帝ニシテ衣ナリ寝ニ衣食住ノ三ツハ人トシテ上セナキ大切ノモノナレハ如是叔陰陽合体シ食住ノ三ツ仮リヌレハ恋ノ哥ナリコトニ人九ハ和歌ノ聖ニシテ人道ノ大変人情ノ実次ニ花鳥月雪ノ風雅是又我国ノ大変ナリコトニ和哥ノ二聖トヤヘル赤人ナリ貶フカキワケモ有ヘケレトモマツアラミ管見ニオヨフ所ヲ云ナリ仏法ノ集編ニト思フ人此境界ノ吟味スヘシ叔克今ニワメリテ作ル書ナラハ古今ニワメラスハ解シカタカラン古ヘヲ以今ヲ解スヘシ今ヲ以古ヘヲ解スヘカラス

夜嘶

寄郭公話　松窓老人句解直話

山嶋郭森　岑　水辺雨雲月
暮雲暁　夜分　夕暮　麻起庵　侍
燈火　雑聞

時鳥も月を梅の花はけり　翁
血を時てんを吐くとるる苦帰楽　来山
津の国の玉川いのかしてきあ　鬼貫
郭公しし紀貫しの折のしに　宗鑑
健礼門院御庵の故事より
寂しい小町うそよ保登々き次々
木別石上の里より遥西ノ住ヲ小町屋ヲ

いそのかみの脱魂を思ひ出し苦の苦を苦の苦を苦の苦を

菜種空(カラ)蒔や地凡乃時鳥　文子
鳴るや見一たんのる紀　〃
蒔て行や埋田拵麦不如帰　〃
郭公加茂河の水　山清師　雪由
時こそ過ぬ　〃　芳帰来　北枝
和歌に時や　〃　牡丹　実邦(ナラ)
牡丹さて八ゝうゝ　〃　ふいゝ　牧童(ヤ)
朝はゝ孔友切九　〃　〃　苔村
見あの和如来　〃　時鳥　〃
岩金ニ大小ノ郭有コノ際ニ和人ウタルヒハ今夜ストソ
時鳥ゝゝ　〃　〃　〃
郭公赤ち郭乃ら川ゝ　〃　北堂
かしまゝ　〃　〃
郭ゝゝ川ゝいゝ　〃　〃

長安万戸子紀一色

時鳥南下り小鄙くゝ　晩意
子紀ゝゝゝゝ　〃　士朗
今屋のゝゝゝ　〃　〃
ゝゝゝゝ　〃　〃
郭ゝゝ　〃　〃
郭ゝゝ　〃　〃
時ゝゝ　〃　〃
郭ゝゝ　〃　〃
時ゝゝ　〃　〃
郭ゝゝ　〃　〃
時

先しやうまうとして時うつり
ぬいやまとしてこゝ来やはなる　冥史
はるゝ色のうちに青をりかつを　蒼机
あるかの乾うあるやうなるやうに　持堂
仮上　定丈

山家集之内の解りの器之
短冊二葉直筆　大きうさ
神明社出て雲白家やこゝ来之　所持
はるさきのおそらしけん接時
ぬいまとしのそのうれ聊れる
春山の家尺うふれて色何を
右自作の白く

そいまとし十支年宇別中村鳥遊

まつかの二葉ふれ宮をへ紀念
接来たりけるのあるつあるる
春うあるとをすして　但二行
山萩のちるやはるのうへ　接西志補
所持

蛙鳴寺

苔踏て花をもあるを冊に見紀道
そいまとし十支年十月京師高倉金屋左衛門方
苔寺自重自賛　立ゐ色未分西乳未天
杉窓をへ帰出分秋楽白作年
幾分お移越ぐれ西文を夏古の白
山吹や荒鶯よ竹を夏を出る
うこゝろうあの白すやうめの花

[illegible]
[illegible]
[illegible]

同じ所にて内侍とはしりて
不易流行の俳先哲ふるくより遺おれ
たるを今さらいひふるす只是を一種の
やさしみとして此事人いおもひて古をふる
さんの輝をも捨ふきゝ物をとるを其家風
の廣るをもとゝす況ものいはぬ草木にて
歌俳を成入云ふの記録を求ひ汚泥を
沉めて生涯ふるすふ能世上七八分いめ(ぬ)
天地運動うつるゝ古今の人ふあるゝ
人物も又古今共ふるゝ ばかりなる
なりて止るゝ所なるゝ俳行い未胡乃

夕戸近しは見硬の語の和 穴かしこ

この本ふる

高 ふるゝ

一 単房心得之事

一 大〻元大事中一ヶ所ニ為ニ彩乃火丹ヲ[illegible]ル事

為ニ[illegible]入ラル[illegible]記事

一 房中掃除怠無[illegible]き事

一 ヶ[illegible]不[illegible]ヶ[illegible]ヶ[illegible]ヶ[illegible]ヶ[illegible]世ヶ[illegible]ヶ[illegible]慶乃

[illegible]ヶ[illegible]ヶ[illegible]ヶ[illegible]ヶ

一　老熊ハ侍ヒ[illegible]を撰り小向我兵[illegible]
中し紀事

一　右此事ハ[illegible]いさ[illegible]ハ事ハ[illegible]
[illegible]と云ふ[illegible]と[illegible]紀
組義の[illegible]ハ侍[illegible]ハ[illegible]事

一　[illegible]ハ仮初[illegible]遠さ[illegible]ハ侍の事

右

卯四月

執事